

42380

教科書文庫

4
8/0
42-1938
200030 1507

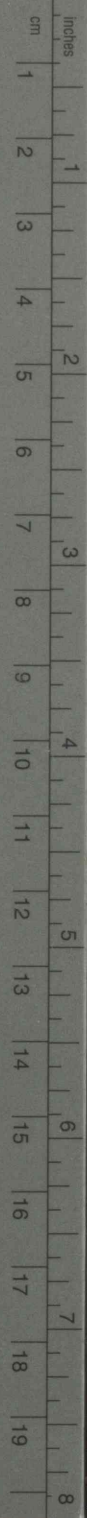
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

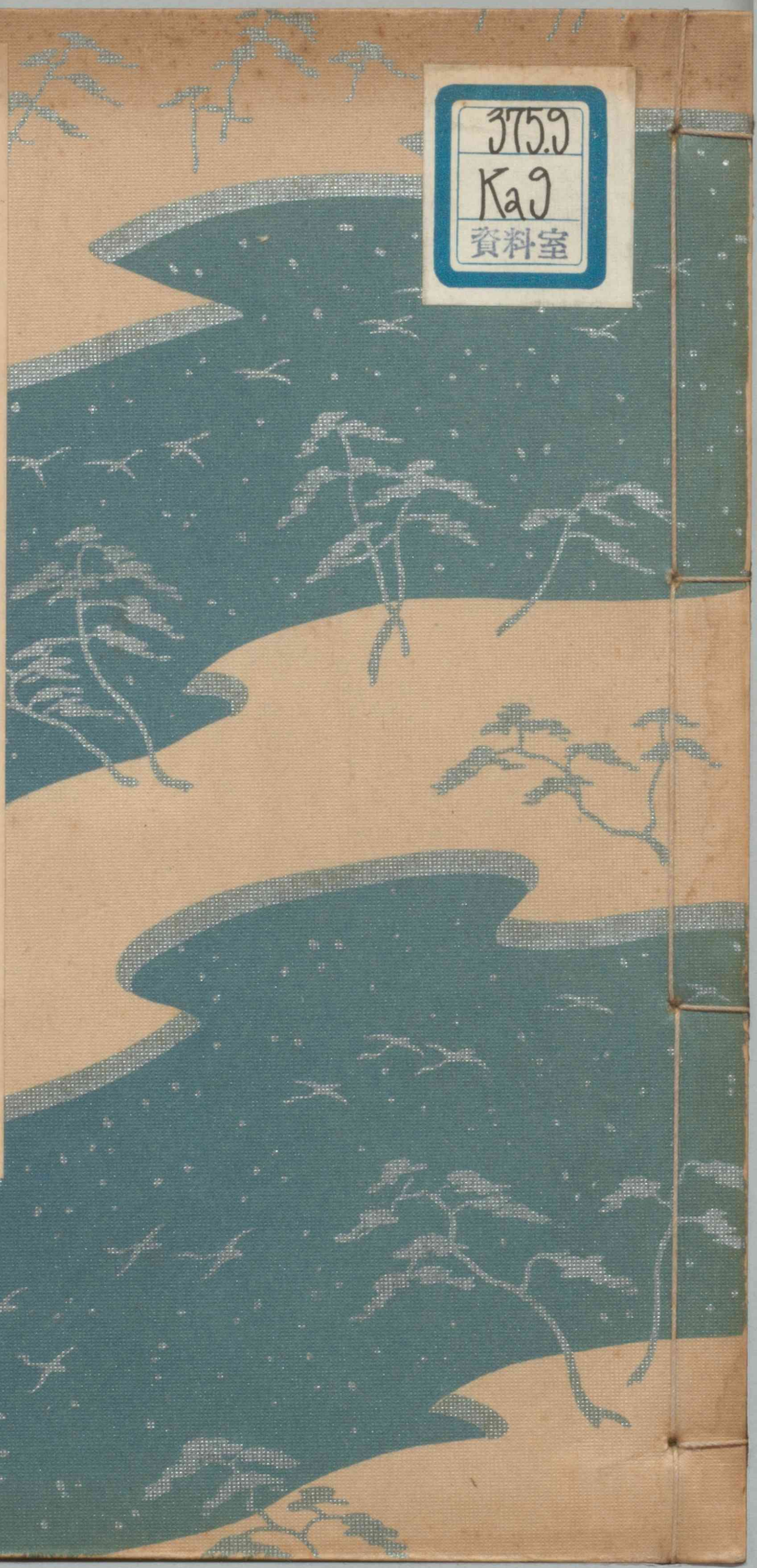
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Ka9
資料室



女子國文新編
四年制 卷七



資料室

395.9
K29

文部省檢定濟

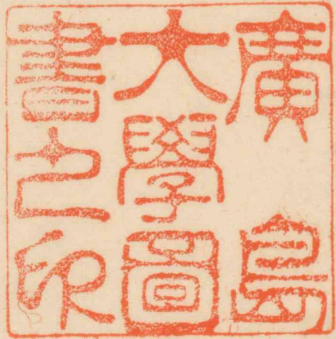
高等女子學校國語教科書 昭和三十三年二月四日

女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授

垣內松三編



- 一 國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。
- 二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。
- 三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。
- 四 右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

目次 (卷七)

一 文學と人生……………小泉八雲……………四

二 明・淨・直……………五十嵐 力……………三

三 中宮寺の観音……………和辻哲郎……………二四

四 古歌の鑑賞……………武田祐吉……………三

五 かぐや姫……………(竹取物語)……………四〇

六 歌と草假名……………尾上柴舟……………四四

七 今様と朗詠…………………………五

八 反省する心……………土居光知……………五五

九 春は曙……………清少納言……………六

一〇 七寶の柱……………泉 鏡花……………六七

二 源信僧都の母……………(今昔物語)……………七

二 銀の猫……………上田秋成……………八四

三 更級日記…………………………九

四 日野山の閑居……………鴨 長明……………九五

五 鎮西八郎……………(保元物語)……………一〇一

六 待賢門の戦……………(平治物語)……………一〇八

七 平重盛……………(平家物語)……………一一〇

八 故郷の花……………(源平盛衰記)……………一一三

九 十六夜日記序……………阿 佛 尼……………一二五

一〇 十訓抄選……………十 訓 抄……………一二四

二 北畠親房……………田中義成……………一四〇

三 落花の雪……………(太平記)……………一五

三 徒然草抄……………吉田兼好……………一六二

附録 日本文學年表(上古・中古・近古)

一 文學と人生

小泉 八雲

批評家の中で最も勝れたものは公衆である。一日や一代の公衆ではなく、幾世紀に亙る大公衆である。時といふ厳刻な試験に通過した一國民乃至人類の輿論である。眞の名聲といふものは、所謂批評家によつて作られるものではない。幾百年間の人類の意見の蓄積によるのである。それは洗煉された批評家の意見のやうに鋭くもなく、明瞭でもない。しかもこれほど確な判断はないといふのは、それが非常に廣大な經驗の結晶だからである。

書物の價値は、それを一度讀んで満足するか、更に繰返して讀みたくなるかで定まる。眞の良書は、最初讀んだ時よりも二度目には一層心が惹かれ、讀返す度に新しい意義と美とを

小泉八雲 イギリスの人。ラフカディオ・ハーン。
(1850-1904)。我が國に歸化して小泉八雲と改む。元東京帝國大學講師。明治三十七年歿、年五十五。

書物の價値云々、ヒル曰く「再度以上讀破することを欲せざる書は讀むことなけれ。」
エマソン曰く「有



見出すものである。教養あり趣味ある人が、二度と讀む氣にならないやうな書物は、大したものではない。假令千萬の讀者に購はれようとも、二度と讀まれないやうな書物は、淺薄なものか、まやかしのものかである。併し又、一個人の判断を絶對



に間違ないものと考へる譯にも行かない。一流の批評家にも往々鑑識の鈍りも曇りもある。たゞ累代の公衆の判断に至つては、疑の餘地がない。

一讀しただけでは、何處がよいとも思へないやうでも、數百年來名著とされて來た書物には、きつと成程と思はれる處がある。時の試験に合格した、このやうな大傑作だけが、眞に藏書とするにふさはしいものである。

二度以上讀みたいと思ふ書物だけを買へ。それ以外のも

名ならぬものは讀むことなけれ。又曰く「一年を経ざる著作は讀むことなけれ。」

のは、特別の理由がない限り買はないがよい。」これが書物選擇の標準である。

かういふ大傑作に含まれてゐる價值は普遍的なものである。大傑作は直ちに青年に感動を與へるものではない。初はたゞ表面の意味や筋が面白いだけであるが、讀者が人生の經驗を積むに従つて、次第にその書の新しい意味が見えて來るものである。十八の時面白いと思つたものは、二十五では一層面白い。三十になつては全然新しい書物に見え、四十にしては、何故今までこれ程の美しさが分らなかつたかと驚く。五十六になつても同じ様なことが繰返される。傑れた書物は讀者の心の成長に伴なつて成長する。シェイクスピアや、ダンテや、ゲーテの作物の偉さは、實にこゝにある。

これについて、ゲーテにはよい例がある。彼は短篇の物語

シェイクスピア

(1564—1616) イ

ギリスの劇詩人。

ダンテ (1265—1321)

イタリアの詩人。

ゲーテ (1749—1832)

ドイツの詩人・

戯曲作者。

をいくつも書いたが、子供にはそれがお伽噺のやうに面白かつた。青年には嚴肅な讀物となつた。中年の者はその中の一字一句にも非常に深い意味を悟り、老人はそこに全世界の哲學と人間の智慧とを見出した。つまり讀者の頭が勝れてゐればゐるだけ、人生を知つてゐればゐるだけ、作者の偉さが分るのである。が、これは作者が自分の作品のもつてゐる廣さや、深さを承知して書いたものではない。勝れた天分は、自ら偉大などとはつゆ知らずに、無意識に働くものである。そして作者の天分が大なれば大なるほど、それを自覺する機會は少ない。なぜなら、偉大な天分ほど公衆は理解するのに長年月を要するからである。

何千年の昔、アラビアの或漂浪者が夜空の星を眺め、人間と、この世を作つた見えざるものとの關係に心を打たれて、その

心情を歌つたものが、今なほヨブ記の中に傳はつてゐる。爾來天文學の進歩は、我々に三千萬の太陽があつて、それには各若干の遊星があるであらうことを教へてゐる。現在の望遠鏡では約三億の他の世界が見える。恐らく是等の世界の内には、智的生物の棲んでゐるのも多からう。火星には我々の文明よりも更に進んだ文明があるといふ證明さへ得られさうである。我々の宇宙の概念とヨブのそれとは、實に霄壤の相違である。しかも、その單純な詩は、それがために一毫もその美と價値とを失はない。のみならず新しい天文學上の發見のある毎に、ヨブの言葉は我々の記憶に新たになる。これはたゞ彼が勝れた詩人で、三千年の古人の心に宿つた眞理をさながらに語つてゐるからである。

アンデルゼンは、道德的眞理や人生の悟は短いお伽噺や童

ヨブ記 舊約全書中の一篇。舊約全書はキリスト降誕以前の記事を集めし猶太民族及び基督教の聖經。三十九篇あり、その内容は法律・歴史・詩歌・豫言の四部に分たる。

アルデルゼン (1801-1842) デンマ

話で教へるに限るといふ考から、古い話を元にして澤山の新しい面白い話を作つた。その書が今日ではどの圖書館にも備へつけられ、子供よりも大人に讀まれる方が多い。その中に人魚の話がある。一體人魚などといふものはあるものではない。見やうによつては馬鹿げた話であるが、この話の中に現れてゐる無私・愛・忠誠の感情は不滅である。讀者はその美に打たれて、話の筋の架空なことなどは忘れて了つて、ただ永遠の眞理を見るのである。

かういふ傑作の中から、自分の爲には何を選定したらよいであらうか。先年英國の科學者ラボックが世界名著百篇を表にしたことがあつた。すると、他の文學者にも、之に倣つて各、信ずる處に従つて、他の百の名著を選出するものが出た。それからもう大分時が経つて、この企は何の役にも立たな

ルクの小説家・詩人。お伽噺作家として名あり。

ラボック (1834-1913) イギリスの科學者・政治家。

つたことが分つて来た。これはラポックの選擇が悪いのではなく、一人の人が銘々異なつた心をもつてゐる多數の人の讀書の課程を決めるといふことが無理だからである。ラポックは自分に最も感銘の深かつた書物を舉げたに過ぎない。他の文學者は彼のとは違つた表を作つたらうと思ふ。書物の選定は如何なる場合にも個人的でなければならぬ。約言すれば、諸子は自分の眼によつて自分で選定しなければならないのである。自分の性格を知りつくし、それに十分の同情をもつてゐてくれない限り、他人に自分の天分が奈邊にあるかを定めて貰ふわけにはゆかない。併し、こゝに一つ容易に出来ることがある。それは先づ第一に、今までどんな題目が一番自分に氣に入つたかを決定することである。第二にその題目のものでは何が一番良いかを決定し、次には、同じ題

書物の選定云々 エ
マソン曰く「嗜好に適合するものは讀むことなかれ。」

目を取扱つてゐると稱してはゐるが、未だ大批評家や大公衆に定評のない場あたりのものを除外して、最良のものに没頭することである。しかしさういふ定評のある書物は澤山にあるものではない。凡て大宗教の教理を書いた經典は、文學的にも第一級に位するものである。それは彫琢に彫琢を重ねて、その國語では出来る限り立派なものに仕上げてあるからである。諸民族の理想を表現した敘事詩も亦、第一級に價する。第三には人生の反映としての戯曲の傑作も、最高の文學に入れてよい。併し、優秀なものはダイヤモンドのやうなもので、ざらにあるものではない。最後に私は年若い讀者に、陳腐ではあるが非常にすぐれた格言を繰返したいと思ふ。それは「新刊書の出版を聞く毎に古い書を読み。」といふことである。

(文學入門)

最良のもの云々 エ
マソン曰く「書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の涉獵に記憶力を徒費することなかれ。」

敘事詩 作者自身の感想・議論を露出せずして、自然・事件・性格を客觀的に敘述したる詩。更に廣義にはかかる題材を描寫せる敘事的文學一般。

戯曲 戯曲の構成は敘事詩の基礎に立つ。しかも作中の人物の科白は抒情思惟的要素を含み、又舞臺藝術としての種々の藝術的要素を攝取せる綜合藝術なり。

二 明・淨・直

五十嵐 力

文武天皇が即位の際に下された宣命の中に左の詞がある。是を以て百官人等四方の食國を治めまつれと任せ給へる國々の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へる國の法を過ち犯す事なく、明き淨き直き誠の心もちて、いやすゝみいやすゝみて緩怠ることなく務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

吾等は此の宣命に在る「明き」「淨き」「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代々の詔勅に幾度も／＼繰返されて居る。而も重きを措いて繰返されて居る。其の他古事記日本紀萬葉集等に於て、重々しい場合に幾たびも用ひられて居る。これは畢

五十嵐 力 文學博士。早稻田大學教授。明治七年生。
文武天皇 紀元一三五年即位。在位十一年にして崩御。御壽二十五。
宣命 君命を臣下に宣る意より轉じて、命令そのものをいふ。これが再變して漢文にて書きし君命を詔勅と呼ぶに對して、國文のものな宣命と稱するに至る。宣命の初めて收められたる書は續日本紀にて持統天皇より桓武天皇に至る六十二篇を載す。平安朝の宣命は日本後紀に收む。
是を以て云々 續日本紀卷一に出づ。
宰 命持の義にて、天皇の大命を承り負ひ持ちて、其の

竟、吾等の祖先が心の中に深く感じたこと、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢發したのではないか。世に大和民族の特性と稱さるゝ現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性を基本として説明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。詳論の餘地なき故に勢ひ抽象的に流れるが、左に一通り其の理由を説く。

鏡の性は明、其の徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明かき心を以て、正しく事物を観た。故にその見方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對してはわれを忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大御神は、鏡を齋きて

國を治むるもの。
古事記 三卷。元明天皇和銅四年（三三）九月十八日、太安麻呂勅を奉じて、語部の稗田阿禮の誦誦せる神代より推古天皇の朝までの傳説・歴史を記録したるものにて、翌年正月二十八日に成れり。漢字の音訓を以て國語を記し、よく上代の面目を傳へたり。
日本紀 日本書紀。三十卷。元正天皇養老四年（天〇）五月成る。舍人親王、太安麻呂・紀清人等勅を奉じて撰す。神代より持統天皇の朝までの傳説・歴史を漢文にて記せり。六國史の一。
萬葉集 我が國最古の歌集で、仁徳天皇以來淳仁天皇に

我が大御前を見るが如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齎かれてある。詔勅や祝詞や、君臣應對の詞などに「明かき心」といふ語が澤山に用ひられて居る。これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治、社會、宗教等の諸方面に亙つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い。無いではないが割合に少なく、またいつもよい加減に切上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來る。毛色が變つて居るので、暫くは争ふが、やがて御互に道理もあり、無理もある事がわかる。と、馬鹿らしくして争論がつかげられなくなる。そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして長短取捨の調停をする。萬事此

至る約四四〇年間の長歌、短歌、旋頭歌を集めたもの、天平寶字三年（四一〇）に成る。
天照大御神は鏡を齎きて云々 古事記上卷の大御神が三種の神器を皇孫瓊杵尊に授け給ふ條に、「この鏡は專ら我が御魂と爲て我が前を拜くが如伊都岐まつれ云々」と詔りたまひきしと見ゆ。
祝詞 神に對して宣り申す詞。
君臣應對の詞 詔勅・宣命と、臣下より奉る上表文等に見ゆる詞。

の通りである。先づ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふから、早速傭聘して我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ、かくて儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛教が入つて來た。餘りに奇怪なので暫く押問答がある、やがて説き方の巧妙なのに打込むと、何等の芥蒂なく、中心から歸依してしまふ。至尊の御身を以てさへ、自ら三寶の奴と名乗らせらるゝやうになる。けれども、天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに黙つては居ぬ。かくて遂に兩部習合といふ伶俐な調和案が成りたつた。武家の世になつては佛教を餘興扱ひして、老後の慰め、助命の口實とするやうになつた。徳川時代になつては、禪の修行に武士ほど都合よきものはなしなどと、釋迦如來の夢にも見ぬ調和説をとらふる高僧が現れた。基督教も二三度の喧嘩が濟んで、もうそろそろ日本も

至尊の御身を以て云云 聖武天皇。東大寺の大佛成るや佛前に向ひて御自ら三寶の奴と稱し給へりといふ。
兩部習合 眞言宗の教理を以て神道を解釋したるもの。兩部習合の稱は眞言密教の金剛・胎藏兩部の教理によりて神道を説明したるに起る。僧空海の唱道なるも徳川時代に吉田兼俱等によつて定まれ

のに成りかけて来て居る。あのくらゐの騒ぎで明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。馬上に天下を得た武將が文藝の奨励に骨折るのも、專制國の君主が「國家人民の爲に立てたる君にて、君の爲に立てたる國家人民にあらず。」などいふのも、アリストートルは其の名著『レトリック』に於て、政體を民主・寡頭・貴族及び君主專制の四種に分ち「君主專制の目的は專制君主一身の保護にあり。」と説いて居る。國民の富めるを自らの富と看做された我が歴聖を始め、名君と呼ばれた諸大名の心掛が、西洋の君主のとは、まるで違つてゐるのも、一つは此の國民性の結果であると思はれる。群雄割據の亂世に、陣中篝火の下に古今集を讀む武將のあるのも、同じ戰國に「敵ぞとて何かは人のに

るなるべしといふ。

編の修行に云々 澤庵禪師(二三三三(五)のこと。徳川家光の頃の僧にて、不動智神妙録を著して禪も劍法も極意に於ては一致することを説きたり。
馬上に天下を云々 徳川家康のことを指す。

アリストートル

(前201-前322) ギリシヤの大哲學者。

「レトリック」 「辯證論」。

陣中篝火の下に云々

島津義久の臣新納武藏守忠元のこと。元龜・天正の間に武功の譽高く、か

くからむ同じみくにの同じ身なれば」と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明かに、理に従ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。大和民族は十字軍や佛蘭西革命の如き極端な狂言を演ずるには、あまりに心が明かる過ぎる傾がある。吾等は日本人を「公正」といひ、理に鋭し」といひ、「感情の平靜を保つ。」といひ、日本人は何事をも受入るゝ胸懐洞然たる人種なり。」というた外人の評が、決して、でたらめの空世辭ではないと思ふ。清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得て居る。淨と明とは似ては居るが、同じくない。其の異ふ趣は丁度鏡と玉との異ふ趣に似て居る。汚穢混濁を忌むことは清明共に同様であるが、清はそれ以上に味はひあり、温かみあることを要する。

つ文學の嗜み深くして、陣中にもなほ古今集を懐にせしとぞ。

古今集 紀貫之を始

め四人の編、勅撰和歌集の最初にして萬葉集につぐ歌集。延喜五年(862)詔出來上る。

敵ぞとて云々 新納忠元の詠。

十字軍 キリスト教徒が聖地エルサレムを回教徒たるトルコ人より奪還せんとして、西暦一〇九九年より一二〇九年まで前後七回に亘つて起したる戰役。

佛蘭西革命 西洋の中世と近世とを區別する大革命にして、ルイ十六世の時フランスに起る(西紀一七九一-一七九三)。

たとへば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣あることを要するが如きものである。本来日本人は明かに事物を見る長所があるのみならず、外物を看るにも自己を發表するにも、一種の味はひある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくして、温潤・圓融・澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來禊祓みそぎが廣く行はれ、且重要視されて居た。祝詞・宣命をはじめとして多くの歌詠・諷諭は、明かき心を現しながら、趣味風韻に富んで居た。しかも其の趣味や形容が諸外國例へば支那の文學に見るごとき張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よく其の實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うて居る。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答

禊・祓 「禊は身に罪穢ある時、水邊に赴きて水にて身を淨むる行事。「祓」は神に祈りて災穢を除く行事。

戰陣の間に云々 生 田森の戰に、梶原景時は梅花一枝を

し、或は胄に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それ〴〵相應はしい文學をもつて居る。外國出稼ぎの労働者が其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、しかしてこれは外國の労働者に絶えて見ぬ所といはれて居る。大工・指物屋の手に成るはかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。是等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではないか。吾等は日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す」というた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふ。直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味

胡觥ここうにそへて挿す。平家の諸將その風流を稱す。 歌詠を贈答し 前九年の役に源義家は安倍貞任が奥州衣川に敗れて逃ぐるを追ひ、衣のたてはほころびにけり」と詠みかけたれば、貞任直ちに「一年を経し絲のみのだれの苦しきに」と答へける故、義家は、その風雅に免じ、射るを止めて歸る。 胄に香を云々 大坂夏陣に、木村重成は豫め死を決し、髪を洗ひ香を胄にたきしめて出陣せり。

する。其の厭ふ所は躊躇・緩慢・首鼠兩端である。曲ること、拗ること、邪なることである。叢雲の劍は其の標章として此の上なく相應はしい。元來直の徳の本領は心の明かに見たところに向つて直前するにある。若し右の三徳を一括してこれを一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明かに見たるところをば、意が直進して實現する。而して知の見方、意の働き方に、潔くして、言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明かき心を以て、父母を見れば、尊し、妻子見れば、めぐし愛し。故にその明かき心の示すところ所に従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅やぐも知し大君。『現つ神』として國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い。故に直前して、海行かば水漬みづく屍、山行かば草むす屍』の獻身的奉

父母を見れば云々

萬葉集に「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐしうつくし」(山上憶良)八隅知し大君「古事記に「高光る日のみこ安みし、我が大君」

公を致す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多くは水臭い思慮、分別利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此處が眞淵宣長等の國學者が感歎し、自負して措かなかつた所である。無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらう。又日本民族にも利害勘定の行爲が無かつたといはれぬであらう。又自然、直實の行爲に弊害が伴なはぬともいはれぬであらう。けれども、我が民族の特長の一面は兎に角、此處に在つたやうに思はれる。其の例は遠い昔では須佐男命、勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分のいたづらして高天の原を震動される。罪さるれば命を畏みて邊土に行かれぬ。出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危険をも顧みず、直ちに八俣の大蛇を退治される。寶劍を得ると、これを先に敵あたいなう

海行かば云々 萬葉集に「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ」(大伴家持)

眞淵 賀茂氏。國學者。遠江の人。荷田春滿の門人。田安宗武に仕ふ。明和六年(一七六九)歿、年七十三。

宣長 本居氏。國學者。松坂の人。紀伊侯に仕ふ。享和元年(一八〇一)歿、年七十二。

須佐男命 伊弉諾尊の御子。天照大御神の御弟。本文の説話、古事記上巻に出づ。

た天照大御神に上られる。行り方がいかにもはき／＼として、直斷決の文字そのまゝのやうではないか。次いでは倭武尊、兄君を搦み批いで、手足を引つ鬪いて、薦に裏んで投棄するといふ亂暴者でありながら、一たび詔を承れば、劍に仗り、千里を獨往して東西の兇賊を平げられた。これ亦須佐男命系統の勇者である。それについては、鎮西八郎爲朝が、腕白勘當九國押領召還保元の勇戦、大島配流の一生、これも須佐男系の大立者。是等はいづれも向う見ずの亂暴者でありながら、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火も辭せず、直前するといふ風がある。直斷決勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローである。其の他、蒙古の來寇に西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ。代々の武士が、

倭武尊 景行天皇の皇子日本武尊。本文の説話、古事記中巻に出づ。

千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男
とぞおもふ

(萬葉集)

この斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠・加藤清正の如き竹を割つたやうに正直な豪傑の、國民に尊崇さるゝを見よ。曾我の五郎朝比奈三郎のごとき一徹者の、國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛んに行はれたるを見よ。おつと出せば、やつと受ける金平淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞偽は知らねど、正直は一旦の依怙に非ずと雖も終に日月のあはれみを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大御神の御言として、神道家に唱へられて居た。是等はいづれも直きを好む性質が、大和民族の基本精髓を成して居る證據である。

(新國文學史)

千萬の云々 高橋蟲磨の詠。萬葉集に出づ。

朝比奈三郎 名は義秀。和田義盛の子。勇武多力を以て聞ゆ。

金平淨瑠璃 淨瑠璃節の一。櫻井和泉大夫の創めしもの。この派にて語るものは、必ず坂田金時の子金平を主人公とし、それが稀代の力量を有して、到る處に悪鬼や妖怪を退治することを筋とする。曲節も豪壯にして、元祿以前の江戸に流行せり。
正直は云々 山本常朝著の葉隠(俗に佐賀論語)の中にある詞。

三 中宮寺の観音

和辻 哲郎

屋根の低い繪殿の廊下を通りぬけて、その後方の傳法堂に行つた。そこにも多くの佛像が竝んでゐるが、しかし夢殿の祕佛を見たあとでは、殆ど目に入つて來ない。埃の多い床板の上を歩きながら、フエノロサの本の挿繪にある壞れた佛像の堆積を思ひ出して、本尊の裏手の廊下のやうな所へ踏みこんだ。壞れた像はまだ随分多く残つてゐた。殊に頭部や手などが埃のうちにごろ／＼轉がつてゐるのには、一種異様なおもしろさがあつた。その中から一つの美しい片腕を見つけて、私はF氏を呼びに行つたりなどした。さうして、おしまひに寺僧に叱られた。

そこを出て中宮寺へ行く。寺といふよりは庵室といつた

和辻哲郎 哲學者。文學博士。東京帝國大學教授。明治二十二年生。繪殿・傳法堂・夢殿共に中宮寺に同じく法隆寺の境内に存す。

フエノロサ (1858-1908) 北米合衆國ホストンの人。哲學者。日本美術の研究者。明治十一年聘せられて我が國に來り、我が繪畫を研究し、東京帝國大學文學部に哲學・論理學・理財學を講じた。美術學校創設者の一人。

中宮寺 奈良縣生駒郡法隆寺村に在る。聖德太子建立、初め法相宗今は眞言律宗。



中宮寺の観音

方が似つかはしいやうな小ぢんまりとした建物で、また尼寺のやうな優しい心持もどことなく感じられる。ちやうど本堂——といつても、離座敷のやうな感じのものであるが——の修繕中で、観音様は厨子から出して、庫裏の奥座敷に移坐させてあつた。私たちは次の室に、御客様らしく座蒲團の上に乗つて、隔の襖をあけてもらつた。いかにも、御目にかゝるといふ心地であつた。

懐かしい我が聖女は、六疊間の中央に腰掛を置いて、靜かに腰かけてゐる。あの肌の黒い艶は、實に不思議である。ねばり強いやうな木とは思へぬ流動的な感じで、微細な面の凹凸を實に鋭敏に生かしてゐる。殊に顔の表情の細かさ、柔かさは、微妙な肉づけの注意が、この黒い艶の助をかりて、始めて完全に現れ得たものと思はれる。あのうつとりと閉ぢた眼に、

しみとくと優しい愛の涙が、實際に光つてゐるやうに見える、あの微かにほゝゑんだ唇のあたりに、この瞬間に閃いて出た愛の表情が、實際に動いて感じられるのは、確にあの艶のおかげであらう。あの頬の優しい美しさも、その頬に指先をつけた手の、いひやうもない形の好さも、腕から肩の清らかな柔かみも、あの艶を除いては考へられない。だから光線を固定させ、或は殺し、或は誇大する寫真には、この像の面影は傳へられないのである。



中宮寺の観音

私たちはたゞうつとりとして眺めた。心の奥ではしめやかに、靜かに、とめどもなく涙が流れた。そこには慈悲と悲哀との杯がなみくと充たされ、それを嬉しく悲しく飲干す心があつた。誠に至純な美しさで、また美しいとのみでは、いひつくせない神聖な美しさである。

私は聖女と呼んだ。観音といふ言葉よりも、その方がふさはしい。しかし、これは聖母ではない。母であると共に處女であるマリヤの美しさには、母の慈愛と處女の清らかさとの結合が、「女」を淨化し透明にした趣があるが、しかし、我が聖女は慈悲の權化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求めるところを、人間の形に結晶せしめたものである。

私の知識の乏しさは、反つて容易に結論をつかませる。凡そ愛の表現として、この像は世界の藝術の中に比類のない獨

マリヤ 聖母。キリストの母。

得なものではないか。これよりも力強いもの、威嚴のあるもの、味はひの深いもの、或は烈しい陶酔を表はすもの——それは世界に稀でもあるまい。しかし、この純粹な愛と悲との標號は、その曇りのない専念の故に、その徹底した柔かさの故に、恐らく唯一な味はひをもつ。その甘美な、牧歌的な、哀愁の浸通つた心持が、若し當時の日本人の心情を反映するならば、この像はまた日本の特質の表現である。古くは古事記の歌から、新しくは歌舞伎、淨瑠璃の文學まで、もの哀としめやかな愛情とを核心とする日本人の藝術は、すでにこゝにその最も優れた、最も明かな代表者をもつてゐるのである。浮世繪の人を酔はしめる柔かさ、日本音曲の心をとるかす悲哀も、その根強い中心の動向は、あの観音に表はされた願望の一つの流に過ぎなからう。法然、親鸞の宗教も、柔弱といはれる平安時

古事記 前課註參照。
歌舞伎 歌舞伎狂言、又は單に狂言ともいふ。能、狂言及び淨瑠璃と並んで近世國劇の三大主流の一として江戸時代三百年の民衆生活を表現した。江戸時代初期に發生し、その中頃完成し、今迄絶えず發展を續けたもの。
淨瑠璃 操淨瑠璃芝居といふ特殊な人形劇に上演せられる戯曲。室町時代中期から江戸時代に入る迄の百七十八年をその發生期とす。

法然 淨土宗の開祖。

代の小説も、あの願望と、それから流れ出る優しい心情とを基調としないものはない。

建曆二年（八三〇）寂、年八十。
親鸞 淨土眞宗の開祖。弘長二年（三三）寂、年九十。

あの悲しく貴い半跏の観音像は、かく見れば、我々の文化の出發點である。古事記の歌も、時代からいつてこの像よりさほど古くはない。勿論現在の形に書附けられたのは、百年近く後である。上宮太子の文化が凝つてこの像となつたとすれば、この像は上宮太子その人の深いしめやかな慈愛を示すものである。日本最初の成文法である太子の憲法が極度に人道的であるのも、また偶然ではない。
が、これ等の最初の事象を生出すに至つた母胎は、我が國の優しい自然であらう。愛らしい親しみ易い優雅な、その癖いづこの自然とも同じく底知れぬ神祕をもつた我が島國の自然は、人間の姿に表はせば、あの観音となる外はない。自然に

上宮太子 御名は厩戸。豐聰耳皇子。用明天皇第二の皇子。後世その徳を稱へて聖德太子と申す。推古天皇の二十九年（六〇一）薨、御年四十九。

醉ふ甘美な心持は、日本文化に貫通して流れる著しい特長であるが、その根は、あの観音と共通に、畢竟我が國土の自然自身から出てゐるのである。葉末の露の美しさをも鋭く感受する繊細な自然の愛や、一笠一杖に身を託して、自然に融入つて行くしめやかな自然との抱擁や、その分化した官能の陶醉、剽逸な心の法悦は、一見この観音と甚だしく異なるやうに思へる。しかし、その異なるのは、たゞ注意の方向の相違で、捕へるところの對象にこそ差別はあれ、捕へにかゝる心情には、極めて近く相似たものがある。母であるこの大地の特殊な美しさは、その胎より出た子孫に同じ美しさを賦與した。我が國文化の考察は、結局我が國自然の考察に歸つて行かなくてはならぬ。

(古寺巡禮)

四 古歌の鑑賞

武田 祐吉

舒明天皇は、大和の高市岡本の宮に都せられた。御位にあること十三年にして崩じ給ひ、押坂の内の陵に葬り奉つた。はじめ息長足日廣額おきながたらしひひろぬかの天皇と申し、後に舒明天皇と申す。萬葉集の歌は舒明天皇の御代から後は漸次數量も多くなつて、彼此の間に系統づけても語られるやうになつた。

天皇 香具山に登りて望國たのみし給ひし時
御製の歌

倭には 群山あれど とりよろふ 天の香具山
登り立ち 國見をすれば 國原くにばらは 煙立ち立つ
海原かまのは 鷗立ち立つ うまし國ぞ あきつ島 倭
の國は

武田祐吉 文學博士。

國學院大學教授。

明治十九年生。

舒明天皇 第三十四

代の天皇。御在位

(元元一三)。同

年崩御、御壽四十

九。

岡本の宮 奈良縣高

市郡高市村元岡村

の飛鳥岡。

押坂 高市郡滑谷岡

に葬り、翌年磯城

郡城島村忍坂に改

葬し奉る。いま押

坂内陵と申す。

天の香具山 奈良縣

磯城郡香久山村に

ある。

海原 香具山の麓な

る壇安の池の廣き

水面をいふ。

「この大和の國には、多くの山があるが、中にも見事なのはこの天の香具山である。その山に登り立つて國見をする。國の廣い所には煙があちらにもこちらにも立つてゐる。水面には水鳥がそこにもこゝにも立つてゐる。良い國であるなあ、この大和の國は。」

萬葉歌人の祖とも申すべき舒明天皇の御製として萬葉集の歌の、最大多数の舞臺なる大和の國の美が敘述せられてゐるのは、いかにも適切である。國土を美める歌は、古くから數あるが、この歌は高處から見下した特色がよく煙立ち立つ、鷗立ち立つの句に見えて、いかにも美しい古代大和の有様が窺はれる。歌體が五七の句を重ねただけの、句數が偶數であるのも、古長歌の正しい風格である。

岡本の天皇の御製の歌一首

夕されば 小倉の山に 鳴く鹿は 今夜は鳴かず
寢宿にけらしも

「夕方になると、いつも小倉の山に鳴く鹿は、今夜は鳴かないで寝てしまつたやうである。」

こゝに、愛が禽獸に及ぶ御製を記すのは、萬葉集の歌が、すべて愛にとづくものであることを代表せしめたのである。國土を愛し、人間を愛し、禽獸を愛して、光輝あるこの集は成り立つたのである。

天皇 宇智野に遊獵し給ひし時 中皇命

間人連老をして獻らせたまふ歌

やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫でたま
ひ 夕には い倚り立たしし 御執の あづさ弓
の中弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし

うまし國「うまし」はほめ詞。
あまつ島「大和」の枕詞。

岡本の天皇 舒明天皇。

中皇命 女性にして帝位に就かれたる方。こゝでは、後に帝位に即かれたる皇極・齊明天皇。御執の 動詞「取る」の敬語法「取らす」の名詞法に、接頭語「み」が添へるもの。御弓を直ちに「みとらし」ともいふ。こゝは、梓弓の修飾句。
あづさ弓 梓の木で作れる弓。

暮獵ゆかりに 今立たすらし 御執みせりしの 梓弓すまなの 中はなず
の 音すなり

反歌

たまきはる 宇智うぢの大野おほのに 馬うま雙ふためて 朝踏あしたま
すらむ その草深野くさふかぬ

「わが天皇陛下の朝には愛撫し給ひ、夕には傍にお寄り立ち
になつた、御料の梓弓の中弭の音が致します。朝獵に今お
立ちになると見えます。夕獵に今お立ちになると見えま
す。御料の梓弓の中弭の音が致します。」

「大和の宇智の大野原に馬を並べて、朝お踏み遊ばしてでご
ざいませう。その草の深い野を。」

この歌は、中皇命の御歌か、間人連老の歌かといふ論がある。
中皇命の御歌ならば、御の字が無くてはならぬ。間人連老が

中弭 弓の上下、弦
をかくる所を本弭
末弭と云ひ、これ
に對して中間を中
弭といふ。

今立たすらし 「立
たす」は、立つの
敬語法。

反歌 長歌のうちの
一節が分離獨立し
たるものにて、古
き長歌にはなし。
たまきはる 枕詞。
内・命・世等を修
飾する。

馬雙めて 馬を並べ
て。多くの騎馬に
て獵をせらるゝを
いふ。
踏ます 「踏む」の敬
語法。

單に御歌の使者として、ただけならば、題辭に名を出すこともあ
るまい。かたゞ、中皇命の旨を承つて、間人連老の作つた歌
と考へる。

長歌は、二段から成つてゐる。それら、同一の句法をもつ
て結んで、重疊の調を成してゐる。偶數句形式で、御執の梓弓
の中弭の音すなりと、ほとんど同音數の短句を重ねて結んで
ゐるのは、雄勁な古格である。朝には夕にはと對句を用ひ、朝
獵に暮獵にと對句でこれを受けたのも、用意がある。然し朝
と夕と異なる時間を一首中に並立させたのは、今がいつれの
時であるかを明かにすることが出来ない。

反歌は四句で切れ、一旦、内容は完結する。五句は更に獨立
した句で、草深い野を感歎したものと解すべきである。

持統天皇は天武天皇の皇后にまします。夫帝の崩後、帝位

持統天皇 天智天皇
の第二皇女。第四
十一代の天皇。御
在位(西暦一三〇)。
始めて太上天皇と

に即き、在位十年にして文武天皇に讓位し給うた。はじめ高天原廣野姫の天皇と申し、後に持統天皇と申す。

天皇の御代には、柿本人麿をはじめ、歌道の天才輩出して、空前の盛觀を成した。いはゆる萬葉集の黄金時代といふべきもの、この御代に始まるのである。

天皇の御製の歌

春過ぎて 夏來たるらし 白栲の 衣ほしたり

天の香具山

「春が過ぎて、夏が來たことと思はれる。天の香具山のほとりでは、白い織物の衣を乾してゐる。」

藤原の宮の附近から、天の香具山を望まれたのであらう。

その山麓の住民が、白い衣服を乾してゐるのに就いて、夏の到來をお感じになつたのである。

柿本人麿 持統・文武兩天皇に仕へ石見に歿す、歌聖と稱せらる。生歿年不詳。

藤原の宮 朱鳥八年(二三四)遷都。今の奈良縣高市郡藤原村にあたる。

元明天皇は、文武天皇の御母にまします。慶雲四年文武天皇の崩御せられた後を承けて帝位にお即きになつた。和銅三年三月、始めて平城に都を遷し、こゝに七代の帝都をお開きになつたのである。

和銅元年戊申 天皇の御製の歌

丈夫の 鞞の音すなり ものゝふの 大臣 楯立
つらしも

「勇士たちが矢を放つ音がする。軍人の大臣が楯を立てて練兵をしてゐることと見える。」

前の御製は、表面には別に感情を表はす語が見えぬ。將軍が武備を整へてゐるといふだけで、語法はむしろ勇まじきものがある。かく感情を表面に露出せぬは、古歌の趣で、力強い樸直な線が、こゝから生まれるのである。

元明天皇 第四十三代女帝。御在位(三三三)一(三三七)。
文武天皇 第四十二代天皇。御在位(三二七)一(三三三)。

題意 天皇は慶雲四年(三三三)御即位、和銅元年はその翌年なり。しかるに恰も蝦夷叛きて、和銅二年三月に、征討の軍を出させらる。前年にその兵を練る物聲をお聞きになりて、御代の初に事あるを歡かせられたる御製。

聖武天皇は文武天皇の皇子にあらせられる。和銅七年立つて皇太子とならせられ、神龜元年禪を受けて帝位に即き給ひ、天平勝寶元年七月、位を皇太子に譲り給ひて、その八年五月崩御せられた。すなはち奈良朝第三代の天皇にましまし、その御代はいはゆる天平時代の盛りを現出した。

天皇の御製の歌

丈夫の 行くとふ道ぞ おほろかに 念ひて行く
な 丈夫の伴

「丈夫の行くべき道であるぞ。等閑に思つて行くな、大丈夫の人々よ。」

六年甲戌 海犬養宿禰岡麻呂 詔に應ふる歌

御民吾 生ける驗あり 天地の 榮ゆる時に 遇

へらく念へば

聖武天皇 第四十五

代天皇。御在位(三

合)一四〇元。天平勝

寶八年(四二)崩御

御壽五十六。

和銅 元明天皇の御

代の年號。(三八)

二五)。

神龜 聖武天皇の御

代の年號。(三三)

二八)。

天平勝寶 孝謙天皇

の御代の年號。(四

元)一四二)。

天平 聖武天皇の御

代の年號。(三六)

一四)元)。

六年 天平六年。

海犬養宿禰岡麻呂

傳未詳。

「臣民の一人であります私は、この天地の榮える時に遇つたことを思ひますと、生ける效のあることであります。」
今來古往、聖明の代を讚稱した歌で、いまだかくの如く力強きものを見ない。初二句に、臣下としての自分の生效のあることを歌つて、云切つたところも強い。第三四句に天下の光り輝く時を敘述したのも、簡にして有力である。天平時代の榮は、ひとりこの歌あるに依つて、いかに輝かしく、我等の心を打つであらう。眞に聖武天皇の大御代の榮を歌ひ表はした歌である。

(萬葉集新解)

五 かぐや姫

今は昔、竹取の翁といへるものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讚岐造麻呂みやつこまろとなんいひける。その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。翁いふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。とて、手にうち入れて家に持て來ぬ。妻の姫にあづけて養はす。美しき事限なし。いと幼ければ籠かごに入れて養ふ。

竹取の翁この子を見つけて後に、竹を取るに、節ふしをへだてて節毎ふしごとに金ある竹を見つくる事重なりぬ。かくて翁やうく

豊かになりゆく。この兒こゝろ養ふほどにすぐくと大きになりまさる。三月みづきばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上など沙汰して、髪上げさせ、裳着す。帳の内よりも出さず、いつきかしづき養ふほどに、この兒のかたち清らなること世になく、家の内は暗きところなく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹立たしきにも慰みけり。

翁竹を取る事久しうなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名をば三室戸齋部秋田みやむらさひのあきたを呼びてつけさす。秋田なよ竹のかぐや姫とつけ侍る。

(竹取物語)

竹取物語 二卷。作者不詳。貞観(五九以後)より延喜(五三以前)の間に成りしものと云はれる。假名によつて表現せられた物語文學の嚆矢をなす。

六 歌と草假名

尾上 柴舟

尾上柴舟 名は八郎
文學博士。東京女
子高等師範學校教
授。明治九年生。

昔の人 藤原爲相。

日本人が他から暗示をも得ず、模範をも示されないうで、作り出した文化の形式がある。それは他にもあるかは知れないが、自分の知つてゐるところでは、第一に歌である。昔の人が、「これのみぞ人の國より傳はらで、神代を受けし敷島の道」といつたのを、自分は、讀過一番、又例の獨りよがり歌人が、わが道尊しとの念から作り出した勝手の理窟だと思つてゐたのであるが、今日になつて考へて見ると、まことにその通りである。孰れの國でも、最初の文學は韻文である。散文は、それに次いで盛んになる。わが國でも、まさにさうであるから、歌が神代を受けたからといつて、敢て誇るに足らないやうであるが、他の文化の數々が、或は支那、或は印度、或は歐米諸國の影響を

受け、指導を得てゐるのに比べると、この歌の昔のまゝで傳はつて、内容的に甚だしい變化を蒙らず、形式的にも著しい差異を示さないで、今日に存して居り、更にそれに従事するものが、國民の殆ど凡てにあるといふことは、まづ奇蹟といつても差支ないであらう。程度は種々あるが、大體到るところに歌人が居り、行くところに詩人が住み、それが三十一音の形式によつて、歌を作つて居り、それによつて歡樂し、親睦してゐる國は、恐らく他に何處にも存在しないであらう。この我が國独自の形式と内容とを持つた歌は、日本人独自の創作であり、更に他の追隨を許さぬものである。勿論、歌も時代につれて變化があり、消長もあるので、多少共に外來思想と連關はしてゐるのであるが、それも小變化、小差異にのみ止つてゐる。従つて、独自の文化の一形式として、何處までもその特色を失はない

ものである。歌の殊に榮えたのは、奈良・平安の兩朝である。即ち前に述べた韻文の時代で、散文はそれらを本として興起した時代、しかも平安朝時代は、奈良朝時代に一步を進めてゐる。それは、歌の價値如何といふ問題よりも、流行の廣く、作家の多かつたことを指すのである。實に平安朝くらゐ、歌の盛んであつた時代はあるまいと思ふ。この後の時代にも、相應の盛りはあつたが、それらは、たゞ平安朝の餘波と見て、差支のない程度に過ぎない。

この歌に伴なつて興起したものは種々あるが、その中で、殊に著しいものは假名である。奈良朝當時には、漢字を借りて、これを寫して居つたのであるが、大體に於て、畫が繁雜で、書くのに手間を要するし、また國語をそれによつて正確に寫すの

は、殊に困難である。それで、漸次、義訓、借訓の用法をやめて、一字一音の制を取つて、音だけはよく寫せるやうにしたが、それでも字畫の方面は、やはり面倒であつた。そこで、更に進んで、それをも略することを始めた。こゝに於て、片假名が出来た。漢字には、楷體だけでなく、行もあり、草もある。殊に、草の宛轉たる趣致は、次第に柔かになつて來た歌の情趣とよく一致し、且筆畫の數も少なく、比較的簡便である故に、楷體の略畫したものを用ひると共に、これをも用ひた。更にまた、それらを略畫して、いよゝゝ簡便にした草假名は、これによつて起つて來たのである。片假名、草假名の兩種が同時に併用されたことは、種々の事實によつて證明される。しかし、歌が盛んになり、優美佳麗な情趣を十分に發揮するに伴なつて、それに適應する草假名の使用が盛んになり、それが遂に漢字の草體の意

味から全然遠ざかつて、字々連系して遊絲の如く、流水の如く、
 紆餘曲折して、當時の歌の趣致を遺憾なく表現するに至つた。
 従つて平安朝時代の歌が、新
 日本思想の發露であると共に
 に、草假名もまた新日本文化
 の具現であるといふべきで
 ある。そして、歌が日本人獨
 自の創造であると共に、假名
 もまた日本人の特異の製作
 であることは勿論である。
 殊に草假名に於て、一層然る
 べきである。たゞその根元
 が漢字にあるから、外來の文化に起因するのが、異なるのみで

あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ

源字の其と體諸名假平

ある。吾人は歌を尊重すると共にこの假名特に草假名を尊
 重せねばならぬ。

歌が當時の先進國の韻文即ち漢詩と異なるが如く、草假名
 は漢字とは同じくない。歌の天下は獨り我が國に於てのみ
 認められると同時に、草假名の世界もまた日本を基礎として
 のみ存在する。歌を見るのに、漢詩を見る眼を以てしてはい
 かぬと同様に、草假名を味はふのに、漢字の趣を基としてはな
 らぬ。勿論根源がそれにあるのであるから、全然風馬牛では
 ない、一脈相通するものがあるにはあるが、其の一脈を擴張し
 て、唯一の大道としてしまふと、大なる誤謬に陥るのである。
 然るに、世間往々、草假名は漢字から來た、漢字と違つた假名は
 あるべきではないとなして、ひたすら漢字を以て假名を律し
 ようとする人のあるのは、株を守り舟に刻するの類で、思はず

風馬牛 左氏傳に、
 「唯是風馬牛不相
 及」也」とある故事
 にもとづきて相干
 涉せざるをいふ。

株を守る 韓非子に
 ある語。
 舟に刻す 呂氏春秋
 にある語。

ること甚だしいものである。

平安朝時代の歌と草假名とは、相互に連絡して、不可分の關係を持つてゐる。この事を説く人は極めて少ない。徳川幕府時代に、國文學が復興されて以來、歌に關する論議が多く起つた。眞淵の如く萬葉を宗とする人もあるが、その人も、猶古今集に關する講説を作つてゐる。景樹の如き、古今集を主とする人は、勿論それに全身の力を入れてゐる。古今集以外の諸撰集にも、種々の人が色々の論議を費してゐる。凡て平安朝時代の歌に就いての研鑽攻究は、盛んに行はれてゐる。歌以外の諸物語・日記にも、多く力が注がれてゐるが、猶歌に較べると遙かに少ないのである。

かやうに、歌に對する研究が盛んでありながら、それと同様

の發達をし變遷をしてゐる草假名に對しては、殆ど何等の研究もしてない。眞淵は非常の能書であり、それに對すると、おのづから渴仰の念を起させるのであるが、その草假名に關する論議は聞かない。千蔭の能書なことはいふまでもないのであるが、草假名の論議は餘りしてゐない。春海も名筆であるが、これに關しては千蔭と同様である。學者が歌にのみ留意して、その書寫の用に供した草假名に對して、殆ど何等の研鑽をしないのは、まことに遺憾である。

これからは、必ずこの我が國独自の文化の研究を完全にせねばならぬ。自分は今日切にこれを思ふ。

(歌と草假名)

七 今様と朗詠

今 様

蓬萊山には千歳ふる、
松の枝には鶴巢くひ、
萬歳千秋重なれり。
巖がそばには龜遊ぶ。

君をはじめて見る時は、
お前の池なる龜岡に、
千代も経ぬべし姫小松、
鶴こそ群れゐて遊ぶなれ。

松の木かげに立ちよりて、
扇の風も忘られて、
岩もる水をむすぶ間に、
夏なき年とぞ思ひぬる。

池の涼しき汀には、
こだかき松を吹く風の、
夏のかげこそなかりけれ。
聲も秋とぞ聞えぬる。

朗 詠

氣霽れては風新柳の髪を梳り、
氷消えては波舊苔の鬚を洗ふ。
(都 良香)

池涼しうして水に三伏の夏無く、
松高うして風に一聲の秋有り。
(源 英明)

嵐陰暮れなむとするとき、松柏の後に凋まむことを契り、

今様 中古時代より行はれたる諷ひもの。七五の調にて八句を連ぬるを普通とす。それが他の文學様式の上に及ぼせる影響少なからず。

朗詠 和漢の詩句中秀句にして朗吟に適したるものを摘出して、朗吟せしもの。今様と共に他の文學作品と連關あり。

都 良香 中古の詩人。文章博士。元慶三年(五九)歿、年四十六。

源 英明 中古の詩人。天慶二年(五九)歿。

秋景早く移るとき、芝蘭の先づ敗るゝを嘲る。

(紀 長谷雄)

雪は鷲毛に似て飛んで散亂し、

人は鶴氅を被て立つて徘徊す。

(白 居易)

松根に倚りて腰を摩すれば、千年の翠手に満ち、

梅花を折りて頭に挿めば、二月の雪衣に落つ。

(橘 在列)

仁は秋津洲の外に流れ、

恵は筑波山の陰よりも茂く、

淵變じて瀬となる聲、寂々として口を閉ぢ、

沙長じて巖となる頌、洋々として耳に満てり。

(紀 淑望)

紀 長谷雄 中古の

詩人。文章博士。延喜十二年(一〇三〇)歿、年六十八。

白 居易 支那唐代の詩人。樂天と稱す。(西紀七三一年)

橘 在列 中古の詩人。歿年未詳。

紀 淑望 中古の詩人。歌人。大學頭。歿年未詳。

ハ 反省する心

土居 光 知

萬葉集と古今和歌集との比較によつて、平安朝の初には、興味の中心が刹那より連續へ、個體的より典型的へ移りつゝ、あつたことを感ずると同時に、反省する心が目ざめて、實感の率直な告白より進んで、想像力による構成的表現の力を得つゝ、あつたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自我を連續の相のもとに見出さんとしたが爲であらう。

日記は現存せるものの他にもあつたことは、紫式部日記及びその他の日記を綜合して作つたらしい榮華物語によつても推察される。また光源氏が須磨に於て繪日記をつけ、紫の上もわが御有様を日記のやうに書き給へり。などある句か

土居光知 英文學者。東北帝國大學教授。明治十九年生。

紫式部日記 二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の日記なり。

榮華物語 四十卷。世繼物語ともいふ。作者不詳。宇多天皇より後朱雀天皇までのことを載せ、ことに藤原道長のことを詳述せり。

紫の上 光源氏の妻。

らも、日記をつけることが、教養あり、徒然わぶる當時の人々の常であつたやうに想像される。かゝる日記は、多くは三人稱で書かれ、表現も回顧的であつた。蜻蛉、更級、和泉式部日記等は和歌が中心であつて、他の部分は後に歌が作られた事情を想ひ出して敘述したと考へらるゝ節が多い。蜻蛉日記の後半は、短篇小説に近づいてゐる。伊勢物語は在五中將日記と稱せられ、和泉式部日記は和泉式部物語とも稱せられた。

されば、平安朝の日記文學は抒情詩と物語との中間に位するものである。自己の生活を反省し、その抒情的に高潮した刹那々々を聯結して表現し、連續の相のもとに人生を觀照する態度は、更に自由に想像力を活かして人生を描かんとする態度に進みゆくのが自然である。物語は汝と我との關係の推移を内容とする。記紀は外なる世界の歴史であり、萬葉集

蜻蛉日記

八卷。右大將道綱の母の作。天曆八年より天延六年までの二十一年間に於ける作者の身邊に起れることを年月のものと記せり。

更級日記

一卷。菅原孝標の女の作。紀行を主とす。

和泉式部日記

一卷。長保五年四月より翌寛弘元年正月までの日記。

記紀

古事記・日本書紀。

は内なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歴史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歴史を輕んじ、心情の歴史を重んじたことは、源氏物語や更級日記の文によつても想像される。

しかし紫式部の考へた心の世界の價值は、餘りに主觀的であつて、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心情の推移が興味を中心になつてゐる。而してその心情の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良朝以後の人々は狭い主觀の世界に閉籠り、平安朝の貴族は權勢や官位を得んとする運動と、歌舞遊樂の生活以外に爲すことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、世間的な經驗を殆ど持たなかつたのである。精神の成長は、主觀と超主觀的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後者が内化さ

更級日記云々

更級日記に、「源氏を一の巻よりして人も交らず几帳のうちにうち臥して心地いてつゝ見る心地、後の位も何かはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともしてこれを見るより外のことしなれば、自ら名などはそらに覺え浮かぶをいみじきことに思ひ云々」

御衣がち

ことごとくしく衣服を着飾りて、そのために容姿は隠されて、只衣服のみ見ゆる様にいふ。

れることによつて可能になる。主観に閉籠つた人々は道德的意識も臆げであり、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連続は弛緩・倦怠・分裂に終る。連続的な姿にせんとすれば却つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑刺たる印象をそのまゝに書きつけた。それは枕草子・徒然草の如き隨筆文學である。

萬葉集と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雑を通過した簡潔さがある。前者は刹那に生きた人々の表現であり、後者は連續の世界を分裂した刹那に集中した精神の表現である。和歌に於ても古今和歌集以後の典型的趣味を超えて、再び印象的な、敘景的な表現に赴いた新古今和歌集の新鮮味は、同一の傾向から生まれたものであらう。

枕草子 清少納言の隨筆。異本多くして卷數も異なり。

新古今和歌集 二十卷。建仁元年(一一六一)十一月三日、後鳥羽上皇の詔を

奈良朝の歌人は純樸であつたが、平安朝の文學者は感傷的になつた。平安朝の優秀な作家は皆、縣歩行あがたあきの國守か、その子女であつて、地方の素樸な生活に接觸し、それと堂上貴族の浮華な生活とを對照して眺め得る位置にあつた。彼等は地方人の蒙昧のうちにある時は都に憧れたであらうが、宮仕をするに及んでは、外面の光彩に心酔することなく、絶えず反省を促されたであらう。藤原氏に私有された文明は、制限された極めて狭苦しいものであつて、貴族生活を讚美することなくしては、その中に迎へ入れらるゝことなく、一言の非難もその圏外に放逐されたであらう。されば彼等の言葉は婉曲をきはめ、思ふことを臆にうちかすめ、人生の批評を言葉の奥深く秘めなければならなかつた。彼等は主観的でありながら主観を直截に表現し得なかつた。かくて文章のリズムは低く、

承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮法師等が撰進せるものにて、三年餘を経て、元久二年三月二十六日成立。現行流布本の完成は尙數年を経、承元四年九月以後とされる。短歌千九百八十八首を分類列載せり。別に藤原良經の和文の序、藤原親經の漢文の序あり。

細やかな調子となり、その表現は不徹底になつた。源氏物語に表現された世界は、永遠の黄昏の沈滞した空氣が垂籠め、描かれた人々は優柔不斷である。平安朝の文明は裝飾の要素が多く、外面の華美によつて内部の貧弱を補はうとしてゐた。貴族等は只享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は恐しいことであつたらう。當時の佛教は國々に國分寺を建てた奈良朝の人道的熱誠もなく、個人の壽福を祈る加持祈禱教となり、寺院、法會、僧侶、讀經等、皆貴族の官能を喜ばすやうに裝飾化された。疫病^(一)ものけの怖れに悩み、享樂の生活によつて無氣力にされた當時の人生には、奈良朝の晴朗は影も留めてゐない。當時の秀でた人々には、この不徹底さを逃れんとする希望が早くから動いてゐた。貫之は諧謔と典型美によつて悲哀を忘れようとしてゐるが、蜻蛉日記の著者

貫之 紀氏。幼名阿古久曾。平安時代の歌人。天慶九年

(一六〇) 疫、年六十五。景樹説によれば八十五。

は當時の婦人の苦悶をかなり深刻に表現した。和泉式部は宮仕の浮沈多き生活と僧庵の靜かな生活との對照を夢のやうに感じた。紫式部は美的生活に對する興味と冥想の傾向とを有し、始は前の傾向に従つて現實と理想とを調和しようとしたが、晩年には後の傾向に従つたやうである。主觀に生きることは、その奥に超主觀的なものを見出すのでなければ、唯自己の世界を狭めるのみである。更級日記の著者は、物語と幻想とのうちに生き、夢と現實との區別もなかつた。夢が賣買されたのはこの時代のことである。藤原氏の榮華が衰微し始めた時、その黄金時代の追懷に現實を忘れようとしたことが、榮華物語などの書かれた動機であらう。しかし沈滞は息苦しいほどになり、彌縫と虚飾とによつて内部の糜爛を隠して來た文明は、全く行詰つて潰滅した。こゝに人生をは

夢が云々「玉葉和歌集」「宇治拾遺物語」「曾我物語」などに、その事實を記せり。

かなみ、これに執著するを迷妄とし、享樂を罪惡とする厭世觀が盛んになつたのは自然である。西行や長明はこの思潮の代表者といふべきである。

平安朝の「つれづれ」といふ語は、世紀末のアンヌイといふ語を聯想せしめる。紫式部はその作品を中宮に奉る際に、「されど徒然におはしますらむ。またつれづれの心を御覽ぜよ。」と書いてゐる。これは紫式部日記が書かれた動機を語つてゐる句であらう。源氏物語を讀んでも、遊樂がつれづれを慰める爲に行はれたことが多かつたのを感じる。つれづれとは展開なき沈滞の惱み、充實した人生を見出し得ざる悶えではあるまいか。兼好が「つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向ひて、心に移り行くよしなしごとをそこはかとなく書き附くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。」と書いたのは、充實した生

アンヌイ 倦怠。

中宮 上東門院を指す。

兼好 ト部氏。又吉

田氏と稱す。室町時代の歌人。文章家。正平五年(三〇)寂、年六十九。

活展開する思惟に入ることが出来ぬ。この途を見出さんがためには分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して、我が姿を如實に眺めなければならぬ。然るに何といふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感ずる。」といふ如き意味ではなからうか。西行や長明は社會と人生とに背き、自然の愛彼岸の宗教に逃れようとした人であるが、兼好はこの對立の一半を捨てて、他の半面に生きるには餘りに複雑な心の所有者であつた。彼の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉室町時代の厭世觀とが争つてゐた。彼にとつて「つれづれ」わぶる「心は靜寂主義に赴かんとする心であつた。彼は「佛に仕う奉るこそつれづれもなく、心の濁も清まるこゝちすれ。」というて、社會生活を離れようとしてゐる。しかし一方には來世の信仰に生きることの出來

西行 俗稱佐藤義清。

鎌倉時代の歌僧。建久元年(一一五〇)寂、年七十三。

長明 鴨氏。通稱菊太夫。剃髮して蓮胤と稱す。鎌倉時代の文章家・歌人。建保四年(一一三〇)寂、年六十四と傳へらる。

ぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて清貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。そして彼が死を直視し、人生の無常を痛感したことは、却つて生の價値を切實に感じ、自己を知り、自己に忠實になり、自己に集中しようとした。かゝる複雑な精神内容を統一することは、當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者であつて、彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮した文章であつて、辯證論的な考へ方の眞摯さがある。之を消閑の戯筆と見ることは不可能である。

(文學序説)

辯證論的 直観・經驗によらず、概念を分析して事の理を研究すること。

九 春は曙

清少納言

春は曙 やう／＼白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜 月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。

雨などの降るさへをかし。

秋は夕ぐれ 夕日華やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭

清少納言 清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕ふ。

もて渡るもいとつきくし。晝になりてぬるくゆるびもて
ゆけば炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわるし。

めづらしといふべきことにはあらねど、文こそなほめでた
きものなれ。はるかなる世界にある人のいみじくおぼつか
なく、いかならむと思ふに、文を見れば、只今さし向ひたるやう
に覺ゆる、いみじきことなりかし。わが思ふことを書き遣り
つれば、あしこまでも行きつかざるらめど、こゝろゆくこゝち
こそすれ。文といふことなからましかば、如何にいぶせく暮
れふたがる心地せまし。よろづのことおもひくゝて、その人
のもとへとて、こまぐと書いて置きつれば、おぼつかなさ
は慰む心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかめる、げに
ことわりにや。

風は嵐こがらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花
風、いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる
風、いとあはれなり。雨のあし横ざまにさわがしう吹きたる
に、夏とほしたる綿衣の汗の香などかわき、生絹の單衣に引重
ねて著たるもをか。この生絹だにいとあつかはしう、捨て
まほしかりしかば、いつの間にかうなりぬらむと思ふもをか
し。あかつき、格子妻戸など押しあげたるに、嵐のさと吹きわ
たりて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月三十日、
十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄な
る木の葉どものほろ／＼とこぼれ落つる、いとあはれなり。
櫻の葉、椋の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所
の庭は、いとめでたし。

野分の又の日こそ、いみじうあはれにおぼゆれ。立藪透垣などのふしなみたるに、前裁ども心ぐるしげなり。大きな木ども倒れ、枝なども吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などの上によるほひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつぼなどに、さときはを殊更にしたらむやうに、こまかくと吹き入れたるこそ、あちかりつる風のしわざともおぼえね。ただ心ひとつに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば物に立ちまじり、人なみくくなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、はづかしきなども、見る人はの給ふなれば、いとあやしくぞあるや。實にそれもことわり、人の憎むをもよしといひ、響むるをもあしといふは、心の程こそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや。

(枕草子)

枕草子 平安朝中期に於ける清少納言の隨筆。

七寶の柱

泉 鏡 花

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。大きな廣い本堂に、一體見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光が幽かに漏れた。裏門の方へ出ようとする傍に、寺の廚があつて、其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ薬師堂、次に寶物庫、さて金色堂、所謂光堂。續いて經藏、辨財天と言ふ順序である。皆參詣の人を待つてはじめて扉を開く。すぐ又あとを鎖するのであるが、寶物庫には番人が居て、經藏には、年の若い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つて居た。はじめ薬師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、こゝ

泉 鏡花 名は鏡太郎。小説家。明治六年生。

中尊寺 天台宗。今延曆寺の末寺。岩手縣西磐井郡平泉村にあり。長治二年(一〇五〇)藤原清衡の創立。

金色堂 境内の北方にあり。

經藏 金色堂の西北にあり。

の番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、かつ芝生に散つて敷いたやうであつた。

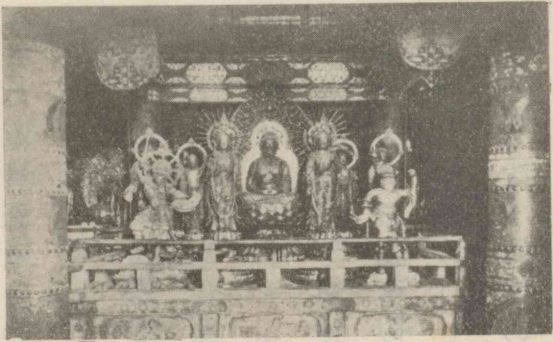
櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。

麓から上らうとする坂の下の取附の處にも一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一所に、たしか「淺黄櫻」と云ふ札が建つて居た。けれどもそれのみには限らない。處々汽車の窓から視た櫻は、奥が暗くなるに従つて、ぼつと牙えを見せて咲いたのはなかつた。薄墨鬱金、また其の淺黄と言つたやうな、どの櫻も、皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帯びて居た。雲が黒かつたためかも知れない。



中尊寺本堂

唯階の前の花片が折からの冷たい風にばら／＼と誘はれて、さつと散つて、此の光堂の中を空ざまに、ひらりと紫に舞ふ



光堂内部分須彌壇

かと思ふと——羽目に浮彫りした孔雀の尾に玉を刻んで、綠青に錆びたのがなほ嚴かに美しい、其の翼をばら／＼とたゞいて——ちら／＼と床にこぼれかゝる。と宙で、黄金の卷柱の光をうけて、ぼつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を睜つた。

床も、承塵も、柱も固より、イめるもの踏む處は黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれない。しかも些のけば／＼しい感じが起らぬ。

螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文珠師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた青い毛の分厚な横顔が視られるのが、づづつと足を舉げさうな構である。右に轡を取つて、一寸振向いて、菩薩にもものを言ひさうなのが優闡王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖ついて立つ。額も、目も、眉も其のいづれもにこゝとして、文珠も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ、獅子が。

此の須彌壇を左に、一架を高く設けて、こゝに紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で本經の圖解を描く。清麗巧緻にして、且神祕である。

文珠師利 文珠菩薩。

優闡王 橋賞彌國の

王。釋迦に歸依す。

西紀前五世紀の人。

善財童子 菩薩の名。

生まれたる時、宅

内に自然に種々の

財寶湧き出てしと

いふ。

淨名居士 維摩詰

(ユキマキツ)。釋

迦と同時の人。

佛陀波利 龍樹菩薩

の弟子。傳不詳。

今こゝに來て此の經を視ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧ぐるが如く、此は月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に、色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人居たのである。私の一禮に答へて、

「ご緩り、ご覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく堂の内壁に廻らした八つの棚に満ちて、二代基衡の此の一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書きの一切經、竝に判官最貞の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。一切經の全部量は、七駄片馬と稱するのである。

「拜見をいたしました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高

毛越寺 中尊寺と同じく平泉にあり。二代基衡の建立。

一切經 佛教の經・律・論の三法門を悉く記したるもの。判官 源義經のこと。

足駄で、卷袖で、寒く細りと草を行く。清らかな僧であつた。高
「辨天堂を案内いたします。」と車夫が言つた。

向うを墨染で一人行く若僧の姿が寂しく、而も何となく尊
く、正にまさしく彼處におはする。天女の御前へ、我等を導
くつゝ、まさしく謙讓なる一個のお取次のやうに見えた。賦
經堂を出た。今は眞晝ながら、月光に酔ひ、桂の香に巻かれ
た心地がして、亂れたまゝの道芝を行くのが、青く清明なる圓
い床を通るやうであつた。言ふまでもなく、堂の内壁に
階の下に立つて仰ぐと、典雅優麗なる辨財天の金字に縁し
て、牡丹花の額がかゝる。

いかにや、年ふる雨露に彩色のがすかに成つたのが、本地の
胡粉を却つてゆかしく顯して、萌黄に群青の影を添へ、葉をか
さねて、白緑碧藍の花をいまく。さながら瑠璃の牡丹である。

ふと高縁の雨落に、同じ花が二三輪咲いて居るやうに見え
た。扉が、ぎいざり／＼と、僧の姿は裏に隠れて見えずに開

く。眞白き面影、天女の姿は、すぐ其處にあらはれ、蜀紅の錦とい
ふ天蓋も廣くかゝつて、眞黒き御髮の寶釵の玉一つをも遮ら
ない御面影の妙なること、御目ざしの美しさ、申さんは恐
れ多い。たゞ西の方遙かに山城國淨瑠璃寺、吉祥天のお寫眞
に似させ給ふ。白理、優婉、明麗なる、十八九ばかりの、ほゞ人だ
けの坐像である。と、手をついて對したが、見上ぐる瞳に、御頬のあたり幽かに、
今にも莞爾と遊ばしさうで、まぎ／＼とは拜めない。神
さして壇を退きざまに、僧のとざす扉につれて、畏くもおんな

淨瑠璃寺 法雲院と
號し、眞言律宗。
九體寺と稱し、九
體の阿彌陀佛奉安
て有名な古刹。京
都府相樂郡當尾村。
吉祥天 佛教に於け
る天女の一。

ごりさへ惜しまれまゐらすやうで、涙ぐましく又額を仰いだ。御堂其のまゝ、私は碧瑠璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たやうであつた。

花の影が、大きな蝶のやうに草に映じた。

下向の時、あらためて、見晴の四阿に立つた。

伊勢・龜井・片岡・鷺尾・四天王の松は、畑中、畝の四處に雲を鎧ひ、搖絲の風を浴びつゝ、或者は蕭々として衣川に枝を聳かし、或者は戀々として高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに眺められる。

其の高館の址を靜かにめぐつて、北上川の水ははるく、瀨もなく、音もなく、雲の果てさへ見え、たゞ「はるか」と言ふやうに流れるのである。

(鏡花全集)

四天王 義經の四天王。伊勢三郎・龜井六郎・片岡八郎・鷺尾七郎。

二 源信僧都の母

今は昔、横川の源信僧都は大和國葛下郡の人なり。幼くして比叡の山に登り、學問してやんごとなき學生になり、ければ、三條の太后の宮の御八講に召されにけり。八講畢つて後、賜はりたりける捧物の物共少し分けて、大和國にある母の許に、かくなむ后の宮の御八講に参りて賜はりたる。始めたる物なれば、先づ見せ奉るなり」とて遣はしたれば、母の返事にいはく、「遣はせ給へる物共は喜びて賜はりぬ。かくやんごとなき學生になり給へるは限りなく喜び申す。但し、かやうの御八講に参りなどして歩き給ふは、法師になし聞えし本意には非ず。そこにはめでたく思はるらめども、嫗の心には違ひにたり。嫗の思ひし事は、女子はあまたあれど

源信僧都 惠心僧都ともいふ。俗姓は卜部氏。天台宗の高僧。他力信仰の開拓者。寛仁元年(一〇二七)寂。年七十六。
横川 比叡山三塔の一。
大和國葛下郡 奈良縣北葛城郡。
比叡の山 傳教大師が延暦寺を開き天台宗の根本道場とした所。平安朝時代に於ける教學の中心地。

も男子はそこ一人なり。それを元服をもせしめずして、比叡の山に上げたれば、學問して、身の才よくあつて、多武峯の聖人の様に貴くて、姫の後世をも救ひ給へと思ひしなり。それをかく名僧にて花やかに歩き給はむは、本意に違ふ事なり。我が年老いぬ。生きたらむ程に、聖人にして在せむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしかと書きたり。僧都これを披きて見るにも涙を流して、泣く。即ち又返事を遣はしていはく、源信は更に名僧せむの心無し。唯尼君の生き給へる時、かくの如くやむことなき宮原の御八講などに参りて、聞かせ奉らむと思ふ心深くして、いそぎ申しつるに、かく仰せられたれば、極めてあはれに悲しく、嬉しく思ひ奉る。然れば仰せに従ひて山籠りを始めて、聖人にならむ。今はあはむと仰せられむ時にぞ参るべき。然らざらむ限りは、山を

多武峯の聖人 増賀

聖人。俗姓は橘氏。叡山て天台の學を究めたが後名利を厭つて多武峯に隠れ、高德の一生を送つた。長保五年(云々)寂、年八十七。

多武峯は奈良縣磯城郡多武峯村に在り、高さ六一九米。山上に淡山神社あり。

叡山。新羅大國の山。新羅大國の山。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

大講堂。大講堂。

出づべからず。但し母も申せども、極めたる善人にこそ在しましけれと書きて遣りつ。其の返事にいはく、今なむ胸落ちるて、冥途も安く覺ゆる。返すく、嬉しく思ひ聞ゆ。ゆめゆめ愚かに在すべからずと。僧都これを見て、此の二度の返事を法文の中に巻き置きて、時々取出して見つゝぞ泣きける。かく山に籠りて六年は過ぎぬ。七年といふ年の春、母の許にいひ遣はしていはく、六年は既に山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねば戀ひしくや思召す。然らばあからさまに詣でむと。返事にいはく、げに戀ひしくは思ひ聞ゆれども、見えむにやは罪は滅びむずる。猶山籠りにて在せむを聞かむのみぞ嬉しかるべき。これより申さざらむ限りは、出で給ふべからずと。僧都これを見て、此の尼君は只人にもなき人なりけり。世の人の母はかくいひてむやと思ひて過す程に九年

になりぬ。

「告げざらむ限りは来るべからず」といひ遣はしたりしかども、怪しく心細く思ひて、母の俄に戀ひしくおぼえければ、若し尼君の失せ給ふべき刻の近くなりたるか、又我が死ぬべきにやあらむとあはれにおぼえて、さはれ来るべからずとはたまひしかども詣でむと思ひて出で立ちて行くに、大和國に入りて、道に男文を持ちて逢へり。僧都いづくへ行く人ぞ」と問へば、男のいはく、「しかく」の尼君の横川に在する子の御房の許へ遣はす文なり」といへば、しかいふは我なり」といひて、文を取つて、馬に乗りながら行く／＼披きて見れば、尼君の手にはあらで、賤しの様に書かれたり。胸塞がりて、如何なる事のあるにかとおぼえて讀めば、「日來何ともなく、風の發りたるかと思ひつるに、年の高きけにやあらむ、此の二三日弱くて、力な

くおぼゆるなり。申さざらむ限りは出で給ふべからずとは心強く聞えしかども、限りの刻になりぬれば、今一度見たてまつらでや止みなむずらむと思ふに、限りなく戀ひしくおぼえ給へば申すなり。疾く／＼在せ」と書きたるを見るに、あやしく心にかくおぼえつるは、かくありければにこそありけれ。親子の契はあはれなる事とはいひながら、佛の道にあながちに勧め入れ給ふ母なれば、かくはおぼえけるなりけりと思ひつゞくるに、涙雨の如く落ちて、弟子なる學生共二三人ばかり具したりければ、それ等にもかゝる事のありければなりけり」といひて、馬を早めて行きければ、日暮にぞ行き著きたりける。急ぎ寄りて見れば、無下に弱くなりて、たのもしげも無し。僧都「かくなむ詣で來たる」と高やかにいへば、尼君「いかで疾くは在しつるぞ。今朝曉にこそ人は出し立ちつれ」と。僧都の

いはく「かく在しければにや、近來戀ひしくおぼえ給ひつれば
参りつる程に、道にして使は逢ひたりつる」と。尼君これを聞
きて、「あな嬉し、死の刻には逢ひ給ふまじきにかとこそ思ひつ
るに、かく在し逢ひたる事、契深くおはれにもありけるかな」と
息の下にいへば、僧都のいはく「念佛は申し給ふか」と。尼君心
には申さむと思へど力なきに、合はせて勸むる人のなきなり
といへば、僧都、貴き事どもをいひ聞かせつゝ、念佛を勸むれば、
尼君、懃に道心を發して、念佛を一二百遍ばかり唱ふる程に、曉
方になりて、消入るやうにて失せぬ。

僧都「我來らざらましかば、尼君の臨終はかくはなからまし。
我、親子の機縁ふかくして、來りあうて念佛を勸めて、道心を發
して念佛を唱へて失せ給ひぬれば、往生は疑なし。況んや我
を聖の道に勸め入れ給へる志に依つて、かく終は貴く失せ給

ふなり。然れば親は子の爲、子は親の爲に、限りなかりける善
智識かなといひてぞ、涙を流しける。其の後七々日の法事を
たしかに修し終へて、弟子ども引具して横川には歸りたりけ
り。

横川の聖人たちもこれを聞きて、あはれなりける親子の契
なりといひてぞ、泣く／＼貴びけるとなむ語り傳へたるとか
や。

今昔物語

人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳者もあ
る。併しいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人
間の徳は人間の徳である。たゞ翻身一回、此の智、此の徳を
捨てた所に、新たな智を得、新たな徳を具へ、新たな生命に入
る事ができるのである。これが宗教の神髄である。

(西田幾多郎)

今昔物語 三十一卷。
平安朝末期の説話
集。源隆國の作と
傳へられる。

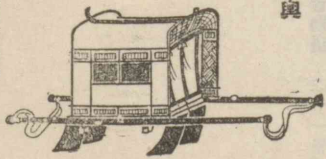
西田幾多郎 哲學者。
文學博士。京都帝
國大學名譽教授。
明治三年生。

三 銀の猫

上田 秋成

文治それの年八月十五日、鎌倉の大將殿鶴ヶ岡の宮居に詣
 でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御あ
 とべ仕うまつれる、浴に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遅か
 らず、列を亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏
 みたいまつれる人数多あるに、お前拂ひしてあなとだにいは
 せず、世にいかめしく貴き御有様なり。廣前を罷りて御手輿
 に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあ
 なるが、見上げ奉る面つき、なほ人ならずとおぼしけん、御輿ぞ
 ひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、
 「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。
 聞し召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の

上田秋成 通稱東作
 (又は藤作)。號を
 無勝・休西等。家の
 號を餘齋・鶴居等
 といふ。國學者。
 大阪の人。晩年は
 京都に住す。文化
 六年(興亡)歿、年
 七十六。
 文治 後鳥羽天皇の
 御宇(治平八五)。
 此は文治二年。
 鎌倉の大將殿 源頼
 朝。
 廣前 神前をいふ。
 手輿
 忌垣 瑞籬ともいふ。
 神社のめぐりの垣
 なり。



類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひかへらん。わがあとに
 連れて來れ。」と召し連れさせ給へり。

御館に入らせられ、御装束改めさせ給へば、やがておほとな
 ぶらあまた照らしかゞやかせ給ひて、御座近き處の一間なる
 簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔藐姑射の山の
 宮仕せし人の世をはかなきものに思ひなして、身は黒うやつ
 れたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りた
 るぞ。弓取る人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあから
 さまと聞くはまことか。武士の荒々しき心には、詠みうつし
 得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、
 笛鼓の音、馬のいなゝき物とも思はぬを、この三十文字あまり
 の學びには心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑
 はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして

雲水 行雲流水の如
 く、住居を定めず
 して、宗師を尋ね
 歩く僧。
 圓位 佐藤義清は保
 延六年出家剃髮し
 て西行又は圓位と
 いふ。時に歳二十
 三。
 穴熊の云々 史記に、
 「西伯將出獵、卜
 之。曰、所獲非
 龍、非鱗、非虎、
 非猨。所獲霸王
 之輔。於是西伯
 獵、果遇太公於
 渭之陽。」
 おほとながら 大殿
 油の略。燈火の意
 に用ふ。
 藐姑射の山の云々
 藐姑射の山は仙洞
 御所を指す。西行
 法師はもと佐藤義
 清と稱し、鳥羽上
 皇に仕へて北面の
 士なりき。
 物の心なし 風流の
 心のなきこと。

軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君が御心のとく猛きまゝにうち詠ませ給はんには、今の人たれかは並びあへ奉らん。三尺の劍を執りて、『大風起り、雲飛揚す。』とうたひ、槩を横たへて、『烏鵲南に』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。』と云ふ。『人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれど頼もしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは世にいみじき弓矢の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。』こは益、恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦

あてになよびかに高尙に優美に。

三尺の劍を云々 漢

の高祖淮南王黥布

を討伐しての歸途

その故郷沛を過ぎ

宗室・故人を召し

て宴を開き、酹に

して自ら起つて大

風の歌を歌へり

と。歌に曰く、大

風起兮雲飛揚。威

加兮海内兮歸兮故

郷兮安得兮猛士兮

守兮四方。』

槩を横たへて云々

魏の曹操、詩思あり、鞍馬の間、往

往槩を横たへて詩

を賦す。その短歌

に曰く、『月明星

稀、烏鵲南飛の邊

樹三匝、何枝可

依。山不厭高、海

不厭深。周公吐

哺、天下歸心。』

士卒の道を病めるを

云々、周の呉起の

故事。

寵を減じて云々 齊

の孫臏の故事。

法師にさへ物問はせ給ふことの忝なさよ。向ひ奉りては、ここがましく家の傳なりなど聞え奉るべうも覺え侍らず、まして有難き大宮仕を否み奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年僅かに二十三にて家を出でたるいたづらもの、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし、罰を軽くせよ。』といひしと、『任ずる者を辱むれば危し。』といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、誠の情よりも覺え侍らず。寵を減じて人を危きに落し入るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出し給へることの、あやしきまで賢くませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。』とて、額を板敷に擦りつけて申す。

二十三 保延六年に當る。

秀郷 西行は依藤太秀郷の九代の後裔。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見の夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器かほらひとりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。鹿しか・猿さるのなかに立交りて歌詠めといふとも詠むまじ。たゞわが前に遊べ。風冷やかなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖かにもこそ。この火取、法師に参らせよ。」とて、白銀もて作りたる猫の形したるを取傳へて、君より賜ふとて、前に置きたり。「鹿・猿は尙心たけし。鼠をだにえとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度おしいたゞさぬ。

あした御暇賜はりて立ちいづるに、御館の人やどりに誰が殿の童べならん。く、り袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、「これ取らせん。火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきら／＼しき物を與へて、顧みもせず立去りぬ。童が主

火取 香爐の類。

鹿・猿 關東の荒武者を譬へていふ。

く、り袴 指貫の一種。



(筆齊容池菊) 師法行西

なる人、「いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけん。」とて、まづ急ぎて、聞え奉る。君うち笑み給ひ、「かの法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とて、男だましひなくば修行もえせぬなるべし。されど家を出で、なほ才に誇りて、野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨て一度けがれし物、その童に取らせよ。」とて、取りおろさせ給ひぬ。

世捨人の云々 西行の歌に、「世を捨つる人がまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」

西行、後にこのことを人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、神の冥福といふものを生まれながら得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。

(藤篋冊子)

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり
小夜の中山

白河の關屋を月のもるかげは人の心をとむる
なりけり

(西行)

漢高 漢の高祖劉邦のこと。陸準龍類、寛仁大度、夙に大志あり、項羽と争ひて天下を保つ。曹孟徳 魏の曹操のこと。兵を用ふること鬼神の如しといふ。

心なき身云々 西行の歌に、「心なき身にもあはれは知られけり、鴨たつ澤の秋の夕暮」藤篋冊子 秋成の歌文集。

三 更級日記

一 あづまぢのはて

あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたに、おひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめける事にか、世の中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるひるまよひゐなどに、姉まゝ、母などやうの人々の、その物語かの物語、ひかる源氏のあるやうなどところどころ語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど我が思ふまゝに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師佛をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとくあげ給ひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せたまへ。」と、身をすてて、ぬかをつき祈り申すほ

更級日記 一卷。菅原孝標の女の著。平安朝に出でし日記。

等身 我が身のたけに等しきこと。
薬師佛 具さには、薬師瑠璃如来。大醫王佛とも稱せられ、特に人間の病を治療するを主とす。

どに十三になる年のぼらむとて、九月三日かどでして、いまちといふところにうつる。

二 足柄山

足柄山といふは、四五日かねておそろしげにくらがりわれり。やうく入り立つ麓のほどだに、そらのけしきはかばかりしくも見えず。えもいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり。麓にやどりたるに、月もなく暗き夜の闇にまどふやうなるに、あそび三人、いづくよりともなくいで來たり。五十ばかりなる一人、二十ばかりなる、十四五ばかりなるとあり。庵の前に傘をさしてすゑたり。男ども火をともして見れば、昔こばたといひけむが孫といふ。髪いと長く、額いとよくかかりて、色白くきたなげなくて、さてもありぬべき下仕などにもありぬべしなど、人々あはれがるに、聲すべて似るものな

足柄山 相模と駿河との境を南北に連なる諸峯の總稱。箱根山はその南部を占めてゐる。

く、空にすみのぼりてめでたく歌をうたふ。人々いみじうあはれがりて、けぢかくて、人々もて興ずるに、「西國のあそびはえかゝらじ。」などいふを聞きて、「なにはわたりにくらぶれば。」とめでたく歌ひたり。見る目のいときたなげなきに、聲さへ似るものなく歌ひて、さばかり恐しげなる山中に立ちてゆくを、人々あかず思ひて皆泣くを幼きこゝちには、まして此のやどりをたゝむ事さへあかずおぼゆ。

まだ暁より足柄をこゆ。まいて山の中のおそろしげなる事はむかたなし。雲は足の下にふまる。山のなからばかりの、木の下、わづかなるに葵のたゞ三筋ばかりあるを、世はなれてかゝる山中にしも生ひけむよと、人々あはれがる。水はその山に三處ぞ流れたる。

三 三河の旅

それよりかみは、ゐのはなといふ坂の、えもいはずわびしきを上りぬれば三河の國の高師の濱といふ。八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。二むらの山の中にとまりたる夜、大きな柿の木の下に庵を作りたれば、夜ひとよ、庵の上に柿の落ちかゝりたるを、人々ひろひなです。宮ぢの山といふ處こゆるほど、十月晦日なるに、紅葉ちらでさかりあり。

嵐こそ吹き來ざりけれ宮路山まだ紅葉ばのちら

でのこれる

三河と尾張となるしかすがのわたりげに思ひわづらひぬべくをかし、

(更級日記)

高師の濱 今の愛知縣豊橋市高師町に屬す。古來歌統として有名である。

二 日野山の閑居

長明

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに齡は年々にかたぶき、住家は折々に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛金をかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。いま日野山の奥に迹を隠して、後南に假の日がくしをさし

長明 通稱菊太夫。剃髮後は蓮風と號す。鎌倉時代の歌人。建保四年(1132)歿、年六十四と傳へらる。

日野山 京都市伏見區醍醐に在り。

出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、内には西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて黒き皮籠かわかご三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたに炭櫃あり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて園とす。すなはちもろくの藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。その處のさまをいはば、南に笕あり。岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山

往生要集 六卷。源

信僧都の著。淨土念佛に歸依すべきことを勧めたるもの。

折箏・つぎ琵琶 共に、用ふる時に接合はせて彈ずるやうに出来たるなり。

外山 日野の山の中に今なほあり。

といふ。正木の葛迹を埋めり。谷繁けれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くして西の方にほふ。夏は時鳥を聴く。語らふごとに死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。稜り消ゆるさま罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてか破らむ。もし迹のしら波に身を寄する且には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江を思ひ遣りて、源都督の流をならふ。若し餘りの興ある

紫雲 佛・菩薩が來迎の時に乗るといふ雲。

迹のしら波 「世の中を何にたとへむ

あさばらけこぎ行く舟のあとの白浪」(滿誓沙彌)。

岡の屋 京都市伏見區、宇治川の東岸。滿沙彌 滿誓沙彌。左大辨堂麻呂。養老五年(三八)出家。

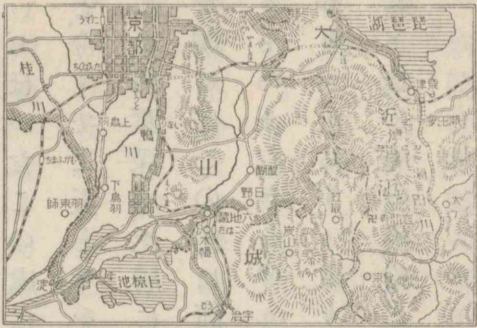
潯陽の江 支那江西省。白樂天の詩「琵琶行」に、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟。」

源都督 桂大納言源經信。琵琶の名手。承徳元年(一七五)歿、年八十二。

時は、しばし松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめむとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居るところなり。かしこに小童あり。時々來りてあひとぶらふ。若しつれづれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることは、これ同じ。或はつばなを抜き、岩梨を採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田居にいたりて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、遙かに故郷の空をのぞみ、木幡山伏見の里、鳥羽羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさばりなし。歩みわづらひなく、志遠く

いたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしくは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁



日大夫が墓をたづね、歸るさには、をりにつけつ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉りかつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く槇の島のかがり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を掻きおこして、老

秋風・流泉 ともに理哲の曲名。

つばな 茶の花。ちがや。岩梨 すないちご。



ぬかご 自然薯などの莖になる小薯。(左挿絵参照)



勝地は云々「勝地本來無定主。大都山屬。愛山人。」(白樂天)

岩間 滋賀縣大津市正法寺の觀音。一名岩間寺。石山 同市石山寺の觀音。

山鳥の云々 「山鳥のほろ／＼となく聲きけば父かと思ふ母かと思ふ」(僧行基)。峯のかせぎ云々 「山ふかみなるし、かせぎのげちかき世に遠ざかるほどぞ知らるる」(西行法師)。埋火云々 「いふこともなき埋火をおすかな冬のれざめの友しなれば」(堀河百首)。

の寢覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色をりにつけて、盡くることなし。況んや深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。おほかたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまたきこゆ。まして數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

(方丈記)

恐しき山云々「山深みけちかき鳥の音はせて物おそろしきふくろふの聲」
(西行法師)

方丈記 一卷。鴨長明の隨筆。日本文學史上の哲學的冥想的試論として、徒然草と並立すべき貴重なる文獻なり。

一五 鎮西八郎

新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東、春日の末に在りければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、並びに多田藏人大夫頼憲都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附きて、多分は内裏へ参りけり。

こゝに鎮西八郎爲朝は、われは親にも連なるまじ、兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬやうに、只一人、いかに強からむ方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂

新院 崇徳上皇を申す。鳥羽法皇を本院と申すに對する稱。
齋院の御所 京都白河にあり。齋院は賀茂神社に仕ふる皇女の稱。
北殿 キタドノ。白河北殿ともいふ。今河東丸太町の邊か。
左府 左大臣藤原頼長。左實の第二子。從一位左大臣に至る。保元元年(一〇六二)崇徳上皇と謀りて兵をあげ、戦死す。年三十七。
忠正 平忠正。忠盛の弟。清盛の叔父。
頼憲 頼憲の孫。頼光の五代の子。左衛門親任の子。爲義の從五位下。次いで從五位下に變せらる。東國に奔らん。とて、果さず、斬る。六條河原に斬る。六條河原に住みたる。せらる。

はむざるなり。」とぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて子供具して固めたり。其の勢百五十騎とぞ聞えし。抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘、馬手に四寸伸びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも處を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなむとて、父不孝して十三の歳より鎮西の方へ追下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の國阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿になつて、君よりも賜らぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従へむとしければ、菊池原田を始として、處々に城を構へてたて籠れば、其の儀なら

(略系)

爲朝 爲義の八男。
保元の亂後、九州に赴かんとして捕へられしも、朝廷其の武勇を惜しみて、死一等を減じ伊豆大島に流す。嘉應二年(二八〇)歿、年三十二。

家弘 平正弘の子。左衛門尉に任ず。

家遠 傳未詳。

忠景・忠國 共に傳未詳。
總追捕使 悪人を追捕するより起りし名。一郷・一郡の

ば、いで落いて見せむ。」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇處なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に優れて、三年がうちに九國を皆攻落して、自ら總追捕使に押しなつて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。源爲朝、久住幸府、忽諸朝憲、咸背論言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。其依宣旨執達如件。然れども、爲朝なほ參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらむこそあさましけれ。その義な

追捕使に對し、一國又は數國の追捕使を總追捕使といふ。

筑紫 上代、今の九州の總名として用ひらる。

菊池・原田 共に九州の豪族。

香椎宮 福岡縣糟屋郡香椎村に鎮坐する官幣大社。仲哀天皇・神功皇后を祀る。

神人 神官・社人。久壽元年 近衛天皇の御宇。(二八〇)。

公能 左大臣實能の子。右大臣に至り、應保元年(二三〇)薨す。年四十七。

上卿 シヤウケイ。公事を取行ふ人の上首をいふ。

外記 太政官の役人。

らば、我こそいかなる罪科にも行はれむず。」とて急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき由申しけれども、大勢にて罷り上らむこと、上聞穩便ならず。」とて、形の如くに附従ふ兵ばかり二十八騎ばかりぞ召具しける。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色の糸を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈎打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らざれば、堅陣を破ること、吳子孫子が難しとするところを得、弓は養由を

宰府 太宰府の略。福岡縣筑紫郡水城村に舊趾あり。

八龍 源家重代の鎧の一。

樊噲 漢の沛の人。高祖の臣として勇猛の名高し。後舞陽公に封ぜらる。
張良 漢の高祖の謀臣。字は子房。天

も恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見むとて、舉り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ。」と宣ひければ、畏まつて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて九國の者ども従へ候について、大小の合戦數を知らず、中にも折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること、夜討に若くこと侍らず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はむに、火を遁れむ者は矢を免るべからず。矢を恐れむ者は火を遁るべからず。主上の御方、心憎くも候はず。但し兄にて候義朝などこそ、駈出でむずらめ。それも眞中さして射通し候ひなむ。まして清盛などがへろへろ、矢、何ほどの事か候べき。鎧の袖にて拂

下統一の後、留公に封ぜらる。
養由 周末の楚の大夫。名は基。弓の名家。百歩を距て、柳葉を射るに、中らずといふことなしと稱せらる。

高松殿 後白河天皇の御所。今の京都市中京區西の洞院の東。三條通の北にあたる。

ひ、蹴散らして捨てなむ。行幸他處へならば、御免されを蒙つて御供の者少々射むざるほどならば、定めて駕與丁も御輿を捨てて逃去り候はむずらむ。其の時爲朝参り向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせむこと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ参らせむこと、爲朝矢二つ三つ放さむずるばかりにて、未だ天の明けざらむ前に勝負を決せむ條、何の疑か候べき。」と、憚るところもなく申したりければ、左府「爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。年の若きが致すところか、夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが今度の合戦の如く、源平各、數を盡くして、兩方に在つて勝負を決せむに、むげに然るべからず。其の上、南都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實、玄實等、吉野、十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者共を召具して、千餘騎にて参るが、今夜

南都の衆徒 奈良興福寺の僧兵。信實・玄實、僧兵の頭立ちたる者。傳未詳。

は宇治に著き、富家殿の見参に入り、曉これへ参るべし。彼等を待ち調へて合戦をば致すべし。又明日、院司の公卿、殿上人を催さむに、参らざる者共をば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばば、殘はなか参らざるべき。」と仰せられければ、爲朝、上には承服申して、御前を罷り立ちて、呟きけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計ひ如何あらむ。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せむとぞ仕り候らむ。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良の大衆も入るべけれ、只今押寄せて風上に火をかけたらむには、戦ふともいかでか利あらむや。敵勝に乗るほどならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。」とぞ申しける。

(保元物語)

富家殿 頼長の父藤原忠實をいふ。太政大臣・攝政關白に至る。應保二年(八三三)號、年八十五。平等院の西なる富家殿に住したり。院司 院の廳。

吉野法師 吉野金峯山藏王堂の僧徒。

保元物語 三卷。主として保元の亂の顛末を記したる戦記物語。作者未詳。

一六 待賢門の戦

さるほどに、六波羅の皇居には公卿僉議ありて清盛を召されけり。紺の直垂に黒絲緘の腹巻に、左右の籠手を差して、折烏帽子引立てて大床に畏まる。頭の中將實國を以て仰せ下されけるは、「王事盥もうきことなければ、逆臣滅びむこと疑なし。但し適新造の内裏なり。若し回祿あらば、朝家の御大事たるべし。官軍偽りて引退かば、凶徒定めて進み出でむか。然らば官軍を入れかへて、内裏を守護せさせ、火災なきやうに思慮あるべし。」と仰せ下されければ、清盛畏まりて、朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の中に候間、時刻を廻らすべからず。然れば定めて狼藉出来せむか。火失なからむ條こそ難儀の勅詔にて候へ。さりながら、范蠡が吳國を覆し、張良が項羽を亡しし

待賢門 大内裏十二

門の一。中御門ともいふ。長さ五間、五層圓極、今の土京區葵屋町に在りき。

六波羅 平家の邸あり。この時二條天皇ここに在ります。

頭の中將 藏人頭に近衛の中將を兼ねたるもの。

實國 源頼國の三男。王事盥きこと云々

詩經の唐風に、王

事盥ハ盥キ不レ能ハ戰

黍稷シ。

同祿 火災。

范蠡 越王勾踐を助け、吳を滅して天

も、皆これ智謀の致す處なれば、涯分武略を廻らして、禁闕無爲なるやうに成敗仕るべし。」と奏して出でられけり。

主上御座あれば、皇居の御固めに清盛をば留めらる。大内へ向ふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼安、伊藤武者景綱、館太郎貞泰、同じき十郎貞景を始として、都合その勢三千餘騎、六波羅を打出でて、賀茂川を馳せわたし、西河原に控へたり。

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫛勾の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺つたる具鞍置かせて、乗り給へり。

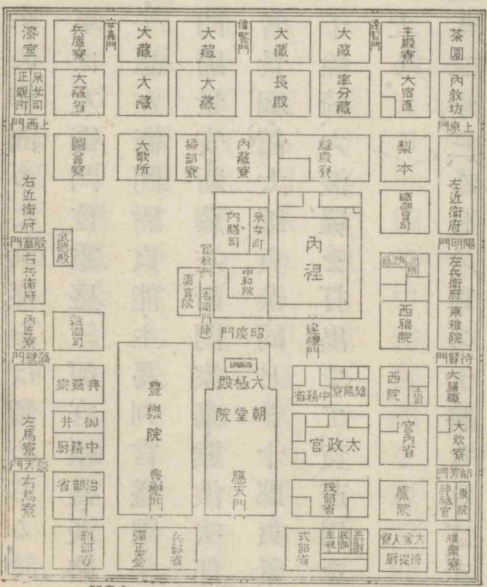
下に朝たらしめたる謀臣。張良 前課註参照。

今日の軍 平治元年(二七)十二月二十七日。

小鳥 平家重代の名刀。

重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げむこと何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲、張良が勇をなさざらむ」とて、三千餘騎を三

手に分つて、近衛中御門、大炊御門、大宮表へ打出でて、陽明待賢、郁芳門へ押寄せたり。



大内には、三方の門をさし固め、表をば開かれたり。承明建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺、桐壺、紫宸殿の前後まで、兵ひしと竝みゐたり。

樊噲 前課註参照。

皆源氏の勢なれば、白旗二十餘旒打立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘旒さし揚げて、勇み進める三千餘騎、一度に関をどつと作りければ、大内も響き渡りて夥し。

関の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顔色變りて草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝顫いておりかねたり。人なみくゝに馬に乘らむと引寄せさせたれども、太り責めたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗煩ふ上、主の心には似も似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でむ、つと出でむとしける、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乗りかね給ふ處を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へ」とて押揚げたり。餘りにや押したりけむ、弓手の方へ乗越して、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂

信賴卿 藤原信賴。時に正三位中納言たり。捕へられて六條河原に斬らる。年二十七。

穆王 周の穆王、八頭の駿馬を驅つて天下を巡行せりと云ふ。

ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将として恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信頼といふ不覺人は臆したりな」とて、日華門を打出でて郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて、押寄せて、呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。かく申すは、桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三」と名乗りかけければ、信頼返事にも及ばず、それ防げ侍ども」とて引退く。大将の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛愈勇みて大庭の椋の木の下まで攻付けたり。義朝これを見て、「悪源太はなきか。信頼といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつる

大将 信頼は勅によらず、自ら大将に任ず。

桓武天皇の苗裔 平

氏は桓武天皇の皇子葛原親王の孫高望が始めて賜はりし姓にて、清盛はその八世の孫なり。太宰大貳 太宰府の長を帥といひ、次を大貳といふ。權帥を置きし以後は大貳あれば權帥を置かず、權帥あれば大貳を置かず。

ぞや、かの敵追ひいだせ」と宣ひければ、「承り候」とて駈けられけり。續く兵には、鎌田兵衛後藤兵衛、佐々木源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部長井齋藤別當、岡部六彌、太猪俣小平六、熊谷次郎平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を雙べて馳向ふ。

義平、大音聲を揚げて、「この手の大将は誰人ぞ。名乗れ、聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の悪源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を討ちしより、此の方、度々の合戦に一度も不覺の名を取らず、年積つて十九歳。見參せむ」とて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎様、横様、十文字に敵をさつと蹴散らして、「端武者どもに目なかけそ。大將軍を組んで討て。櫛の匂の鎧

清和天皇九代の後胤

源氏は清和天皇の皇子貞純親王の御子經基王が始めて賜はりし姓にて、義朝はその七世に當る。

大藏 埼玉縣比企郡菅谷村。

帶刀先生 兵仗を帯びて東宮に侍する武官を帶刀といふ。先生はその長官の稱。

に、蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕にせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衛門・新藤左衛門を始として、百騎ばかりが中にぞ隔りける。悪源太を始として、十七騎の兵ども、大將軍に目をかけて大庭の椋の木の中に立てて、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まむくとぞ揉うだりける。十七騎に駈立てられて、五百餘騎叶はじと思ひけむ、大宮表へさつと引く。

大將左衛門佐の弓杖突いて、馬の息を繼がせ給ふ處に、筑後守つと参りて、曩祖平將軍の二度生まれ替り給へる君かな。」と向うざまに響め奉れば、今一度駈けて家貞に見せむと思はれけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。

筑後守 平家貞。

平將軍 平貞盛。

又悪源太駈向ひ、見廻して言ひけるは、「只今向ひたるは皆新
手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らす
とも、今度に於ては餘すまじ。押雙べて組みて捕れ、兵ども。」
と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進みければ、
今度は、難波次郎・同じき三郎・瀬尾太郎・伊藤武者を始として、百
餘騎が中に隔てたるに事ともせず、悪源太弓をば小脇にかい
挟み、鎧ふんばり突つ立ちあがり、左右の手を舉げ、幸に義平源
氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はむ。
寄れや、組まむ。」と言ふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下の
追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。

重盛組みぬべうもなくや思はれけむ、又大宮表へ引いて出
づ。悪源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼
がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げ

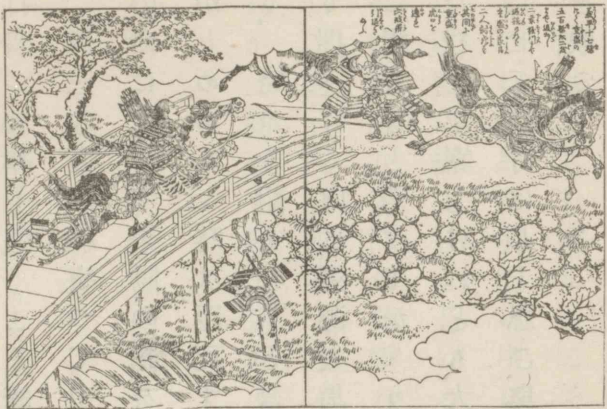
瀧口 藏人に屬し、
禁裏の警衛を司る
職名。

ばこそ、敵度々駈入るらめ。あれ速かに追出だせ。」といひ遣
されければ、俊綱馳せてこの由を言ふに、承り候。進めや者ど
も。」とて、色も變らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百餘騎が
中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を
立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、わが子なが
らも義平は、よく駈けたるかな。あ、駈けたり。」とぞ譽められ
ける。

大將重盛與三左衛門景安新藤左衛門家泰、主從三騎駈けは
なれ、二條を東へ引かれければ、悪源太鎌田にきつと目くばせ
て、「此處に落つるは大將とこそ見れ。返せや。」とて追つかけ
たり。既に堀河にて追詰めけるが、弓手の方に材木多く充ち
満ちたるに、悪源太の乗り給へる馬、片なつきの駒にて、材木に
や驚きけむ、馬手の方へ蹶けし飛んで、小膝を折つてどうと伏す。

堀河 大宮通と洞院
通との間の通。

鎌田兵衛延ばさじと、十三束取つて番ひ、よつびいてひようと



保元平治關圖會

射る。重盛の射向いひの袖にはた
と中りて飛返る。やがて二の
矢を射たりければ、押附にちよ
うと中りて、篋かかつぎ碎けて跳
り返れり。悪源太、これは聞ゆ
る唐皮といふ鎧よろいござんなれ。
馬を射て、落ちむ處を討て。」と
下知せられければ、復よつびい
て追ひざまに筈はずの隠るゝほど
射込みたり。馬は屏風を返す

唐皮といふ鎧 平家
重代の鎧。

如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、兜も落ちて大童になり
給ふ。鎌田堀河を馳越えて、重盛に組まむと落合ふ。

大童 髪かみの結びが解
けて、童子の髪かみの
如く垂れ亂るゝこ
と。

重盛近づけては叶はじとや思はれけむ、弓の弾にて鎌田が兜の鉢をちようと突く。突かれてよろめく間に、兜を取つて打着つゝ、緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳寄つて中に隔り申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主辱づかしめらるゝ時は臣死すと言ふにあらずや。景安此處に在り。寄れや、組まむ」と言ふまゝに、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へける處に、悪源太馬引起し、これも堀河を馳越えて、重盛に組まむと飛んでかゝりけるが、鎌田をや助けむ、大將をや討たむと思案しけれども、大將には復も寄せ合ふべし、正家を討たせては叶はじと思ひ、與三左衛門に落合うて、三刀刺して首を取る。

重盛は、憑み切つたる景安討たせて、命生きて何かせむとて、

既に悪源太と組まむとせられけるを、新藤左衛門馳來り、家泰が候はざらむ處にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。とて、わが馬を引向け、中に隔てて悪源太とむずと組む。正家は重盛に組まむとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひければ、新藤左衛門に落重なつて首を搔く。この間に、重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。

(平治物語)

縦ひ勇力ありとも人和せずば、終に勝つことを得ず、兵書の詞に云はく、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと云へり。尤も思慮あるべき事共なり。(平治物語)

漢の紀信云々 漢の高祖、項羽に滎陽に圍まれし時、紀信は高祖と偽り稱して城門を出で、その隙に高祖を脱せしむ。

平治物語 三卷。作者不詳。平治の亂の顛末を記せり。

一七 平重盛

太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゑ、しうぞ見えし、「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋緘の鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事いかゞ思ふぞ。保元はうげんに平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は故刑部卿殿の養君やうくんにてま

しまししかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先をかけたたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴・義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇くらみとなりたりしにも、入道隨身を捨てて、兇徒を追ひ落し、經宗、惟方をめし縛めしに至るまで、君の御爲にすでに命を失はんとする事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでこの一門をば七代までは思召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光と申す下賤の不當人が申すことに、君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後はいかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ、

太政の入道 太政大臣平清盛入道淨海。

腹卷 鎧の一種。腹に巻きて背にて合はす。

胸板せめ 鎧の胸板をひしと胸につけて著たるなり。

蛭卷 蛭の巻きつきたる如くに、藤・銀などにて、間をすかして巻くなり。

木蘭地 黄・紅・赤の混じたる色。

保元 後白河天皇の御代の年號。(八六一六元)。

平右馬助 清盛の叔父忠正。

新院 崇徳上皇。一宮 崇徳上皇の皇子重仁親王。

故刑部卿 清盛の父忠盛。

故院 鳥羽法皇。

平治 二條天皇の御代の年號。(八九一八元)。

信賴 藤原信賴。

義朝 源義朝。

院内 後白河上皇と二條天皇。

經宗 藤原經宗。

惟方 藤原惟方。

成親 藤原成親。

西光 藤原師光。入道して西光といふ。

不當人 道理にはづれし行なす者。

法皇 後白河法皇。

鳥羽の北殿 京都の南郊鳥羽にありし、所謂城南離宮。

御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者どもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著脊長取出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳せ参つて、「世は早かう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな。」と宣へば、「その儀にては候はねど、入道殿の御著脊長を召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出で立ち候ひつれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし参らせんとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣、何によりて只今さることのおはすべきとは思はれけれども、今

著脊長 大將の鎧をいふ。
小松殿 平重盛の邸。

朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおはすらんとて、急ぎ



(筆湖廣橋高) 圖言諫盛重

車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に、思ひくの鎧著て、中門の廊に二行に著座せられたり。その外、諸國の受領衛府諸司などは縁に居こぼれ、庭にもひしと竝み居たり。旗竿など引側め引側め、馬のはるびを固め、冑の緒を締め、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子、直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ

西八條殿 清盛の邸。

はるび 腹帯。

指貫 裾を括る袴。

見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうにふるまふものかな。大いに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て向はんこと、さすが面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹そけいの衣をあわて著きに著給ひたりけるが、胸板の金物のすこし外れて見えけるを隠さんと、頻りに衣の胸を引違へ〜ぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

や、あつて入道宣ひけるは、あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず。一向いっかう法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を

鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ、御幸をなし参らせんと思ふはいかに。」と宣へば大臣聞きもあへ給はず、はら〜とぞ泣かれける。入道いりだうさていかにや、いかに。」と呆れ給へば、稍あつて大臣涙を抑へて、この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。又御有様を見参らせ候に、更に現とも覺えず候。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申し乍ら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより、この方、太政大臣の官に至る人の、甲冑をよるふこと、禮儀を背くに非ずや。就中御出家の御身なるに、法衣を脱ぎ捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しまし、まさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申事に

その端を取つてさ
わさわと音たてて
歩めるなり。



五戒 不殺生・不偷
盜・不邪淫・不妄
語・不飲酒。
五常 仁・義・禮・
智・信。

て候へども心の底に旨趣を残すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地に非ずといふことなし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況んや、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふいはゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩に非ずや。今これ等の莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、紊りがはしく法皇を傾け参らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふ可からず。しかれば君の思召し立たせ給ふ所、道理半ばなきに非ず。中にもこ

普天の下云々 詩經の小雅北山篇に、「溥天之下、莫不韋韋、王土、率土之濱、莫不非王臣。」

潁川の水に耳を洗ひ許由といふ隠士の話。堯が許由の人物なるを知つて天下を譲らんとせしを、由は聞くだに耳汚れたりとして、潁川の水に耳を洗へり。

首陽山に蕨を折りし伯夷・叔齊の兄弟、周の武王の殷を討つを諫めて聽かれず、殷の亡びし後、周の粟を食ふを義とせずして、首陽山に隠れて蕨を折つて食ひ、遂に餓死せり。

蓮府・槐門 共に大臣を稱することば。蓮府は、南史に、「王儉といふ宰相、

の一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めし事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて事既に露はれ候ひぬ。その上仰せ合はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、假令君いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させて、君の御爲には愈、奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思召し直す事、などか候はざるべき。

これは、尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふこと

その邸に芙蓉を植う。時人よりて之を蓮花池といへり。槐門は、もと周の世、朝廷に三槐を植ふ、三公これに面して坐したりといふ。よりて三公の異稱とす。

なし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりもなほ高き父の恩、忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、又院中をも守護し参らすべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡



平重盛畫像

千顆萬顆の玉 和漢朗詠集に菅三品の「瑩日瑩ノ風、高低千顆萬顆之玉。染レ枝染ノ波、表裏一入再入之紅。」
迷廬八萬 迷廬は蘇迷廬の略。一に須彌山といふ。妙高山と譯す。佛經にいふ極めて高き山。

きんこと難かるべきに非ず。『富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ず傷む。』と見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候べき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂目にあひ候重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の内へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずることは、いと易き程の御事にてこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりにかきくどき、さめくと泣き給へば、その座に並み居給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。
入道頼みきつたる内府はかやうにのたまふ世にも力なげにて、「いや、それまでの事は思ひも寄りさうず。悪黨どもの申す事に君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出で来んずらんと思ふばかりにてこそ候へ。」大臣、たとひいか

なるひがごと出で來候へばとて、君をば何とかし参らせたまふべき。」とて、つい立つて中門に出で、侍どもにのたまひけるは、「只今これにて申しつる事どもをば、汝等はよく承らずや。今朝よりこれに候ひて、かやうの事どもを申ししづめんとは存じつれども、あまりにひたさわざに見えつる間、先づ歸りつるなり。院參の御供においては重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ、されば人參れ。」とて、小松殿へぞ歸られける。

(平家物語)

戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ帷幄に參じては畫策を百里の外に運らし、世静まれば儀禮彼に於て備はり、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼は常に平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の名鑑たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし。重盛實に第一の人なりき。

(高山樗牛)

高山樗牛 名は林次郎。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

一八 故郷の花

薩摩守忠度は入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りたりけるが、郎等六騎相具して、忍びて都へ歸りのぼる。如法、夜半のことなるに、五



(筆三月形尾) 度 忠 平

條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、

亂れの世なる上、いぶせき夜半のことなれば、敲けども敲けども明けざりけり。あまりに強く敲きければ、やゝ久しくありて、青侍をいだし、戸を開かでこれを問ふ。「忠度と申すもの見

忠度 平忠盛の子。壽永三年(八四四)歿、年四十一。
入道 平清盛。入道して淨海といふ。

俊成 藤原氏。皇太后宮大夫。歌人。五條京極に住めり。元久元年(八六四)歿、年九十一。

参に申し入れたきことありて参りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めに開きて對面あり。

忠度宣ひけるは、「かゝる身として御爲憚りあれども、所詮一門榮華盡きて、都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り、亡びんこと疑なし。世鎮まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。たとひ身は八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出して、川尻より忍び上つて侍り。これぞ年頃詠み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑となさんこと遺恨に侍り。之を砌下に進らせおき候。勅撰の時は必ず思召し出せよ。」とて、卷物一卷泣くく、鎧の引合せより取出したり。三位感涙を流してこれを受取り、御詠一卷預りおき候ひをはん

ぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。この忽劇の中に御音信に預ること、恐悦少なからず候かな。たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の時は思ひ出し侍るべし。」と宣へば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふことなし。」とて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。

後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

とうちあげく、詠じつ、南を指してぞ落行きける。本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそあはれなれ。三位もなごりの惜しくして、遙かにこれを見送りても、「あはれ世に在りしには、この人どもにこそ諂ひ追従せし

古詩 大江朝綱の作、和漢朗詠集に出づ。

に、變る習として、今は門を隔つることの悲しさよ。」と、哀れなるにも涙、優なるにも涙、忍びの袖をぞ絞られけり。

世鎮まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻より上りたりし志を思ひ出し給ひて、「故郷の花」といふ題に、「よみ人知らず」として、一首入れられたり。

さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山

ざくらかな

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、たゞ一首ぞ入れられける。亡魂いかにうれしく思ひけん。あはれにやさしくぞ聞えし。

(源平盛衰記)

千載集 後鳥羽天皇の文治三年(八四七)後白河天皇の院宣によつて撰した。

志賀の都 天智天皇の都し給うた處。ながら 長等にかけていつた、長等山は近江國にあり。

源平盛衰記 四十八卷。二條天皇の應保年間より安徳天皇の壽永年間に至る約二十年間の源平二氏盛衰の諸事件を記せるもの。作者不詳。

一九 十六夜日記序

阿 佛 尼

昔かべの中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづくきの岡のくず葉、かへすも書き置く跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。

又賢王の人をすてたまはぬまつりごとにも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくれば、やまと歌の道はたゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。ひのもとの國にあまの岩窟ひらけし時、よもの神たちのかぐらのことばを

十六夜日記 一卷。

「阿佛尼東下り」

「阿佛尼海道記」等の別名あり。

阿佛尼 北林禪尼との後室。藤原爲家の後室。爲相の母。和歌・文章に長ず。弘安六年歿、年七十五。

かべの中「魯恭王使人、壘、夫子講堂、於壁中石函、得古文孝經二十二章。」古文孝經、孔安國の序。

はじめて世を治め物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは記しおかれたりける。さても又集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度勅をうけて、代々に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけむ。そのあとにしもたづさはりて、二人の男の兒どもも、ちの歌のふるほどもを、いかなる縁かありけむ、預りもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世を弔へとて深きちぎりをむすびおかれし細川のながれも、故なく塞きとめられしかば、あと弔ふのりのもし火も、道を守り、家をたすけむ親子のいのちも、もろともにきえをあらそふ年月を経て、危く心細きものから、何としてつれなく、けふまではながらふらむ。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらむ

物をやはらぐ 「男女の中にも利げ、武きものゝふの心をなぐさむるは歌なり」(古今集の序)
二度勅をうけて 定家(新古今集・新勅撰集)爲家(續後撰集・續古今集)。
二人 爲相・爲守。

細川のながれ 播磨國細川莊。

あづまのかめの鏡 鎌倉幕府の鏡。

かたなく、さてもなほ、あづまのかめの鏡にうつさば、くもらぬかげもやあらはるゝと、せめておもひあまりて、よるづの憚りをわすれ、身をえうなきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。頃はみ冬たつはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らずみ、時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつつ、事に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしととも、とゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。目かれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍従・大夫などのあながちに打屈したるさま、いとこゝろぐるしければ、さまゝいひこしらへつ。代々に書きおかれける歌の草子どものおくがきして、あだ

頃はみ冬たつ 阿佛尼の出發は建治三年(一一七三)十月十六日。

人やりならぬ 「人やりの旅ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りこむ」(古今集)。

侍従 爲相(十三歳)。大夫 爲守(十一歳)。

ならぬかぎりをえりしたゝめて侍従の方へ送るとて書きそへたる歌

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草これを昔のか

たみとも見よ
あなかしこよこ波かくなはま千鳥一方ならぬ跡

を思はば
これを見て侍従のかへりごといと疾く有り。

遂によもあだにはならじ藻鹽草かたみを三代の
あとに残せば
迷はまし教へざりせばはま千鳥一方ならぬ跡を

それとも
このかへりごといとおとなしければ心やすくあはれなる

にも昔の人に聞かせたてまつりたくて又うちしほたれぬ。

昔の人 亡夫爲家を指す。

大夫の傍さらず馴れきつるをふり捨てられなむなごり、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるくゝと行くさき遠く慕はれていかにそなたの空を眺めむ

とかきつけたるものより殊にあはれにて、同じ紙に書添へつ、つくづくと空な眺めそこひしくば道遠くともは

や歸り來む
とぞ慰むる。

山より侍従の兄の律師もいでたち見むとておはしたり、それもいと心細しと思ひたるを、此の手習どもを見て、又書添

へたり。
あだにのみ涙はかけじ旅ごろも心のゆきてたちかへるほど

山 比叡山。京都の東にあり。延暦寺のある所。
侍従の兄 爲相の兄源承。

とは言忌こといみしながら、涙のこぼるゝを、荒らかにものいひ紛らはすも、さまざまあはれなるを、阿闍梨の君は山伏にて、この人々よりは兄なり。此のたびの道のしるべに送り奉らむとて、出で立たるめるを、この手習に又まじらはざらむやはとて、書付く。

立添ふぞうれしかりける旅衣かたみにたのむ親のまもりは

女子はあまたもなし。たゞひとりにて、此の近きほどの女院にさぶらひたまふ。院の姫宮ひとところ生まれたまふばかりにて、心づかひも實まことしきさまにて、おとなしくおはすれば、宮の御方の戀しさも、かねて申しおくついでに、侍従・大夫などのこと、はぐくみおふすべきよしも、こまかに書きつけて、奥に君をこそ朝日とたのめふるさとに残るなでしこ

阿闍梨の君 名は摩融。

女子 紀の内侍。
女院 龜山天皇の妃、
新陽明門院。

霜に枯らすな
と聞えたれば、御かへりもこまやかにいとあはれにかきて、歌の返しには、

思ひおく心とゞめばふるさとの霜にも枯れじや
まとなでしこ
とぞある。

いつゝの子どもの歌、残りなくかきつゞけぬるも、かつはいとをこがましけれど、親の心にはあはれに覺ゆるまゝに書集めたり。さのみ心弱くてはいかゞとて、つれなくふり捨てつ。

(十六夜日記)

いつゝの子 紀の内侍・摩融・源承・爲相・爲守の五子。

二〇 十訓抄選

淀のわたり

俊頼朝臣語りて曰く、「白川院、淀に御方違の行幸ありけるに、五月ばかりの事にやありけむ、女房殿上人の舟などあまたありけるに、暁になるほどに、向ひの方に郭公一聲ほのかに鳴きてすぐ。俊頼一首詠ぜまほしくおぼえしに、女房の舟の中に忍びたる聲にて、『淀のわたりのまだ夜ふかきに。』と詠められたりし、時に臨みてめでたかりき。人々感歎して今にわすれず。あたらしくよみたらむにはまされり。」となむいはれる。

香爐峯の雪

一條院、雪いとおもしろく降りたりける朝、端近く出で居さ

十訓抄 三卷。作者

不詳。舊談・古説の教説に益あるもの二百五十條を十日の下に収録す。鎌倉時代の中頃（元三年頃）出づ。

俊頼 大納言源經信の子。金葉集の撰者。

淀 京都府久世郡淀町にあり。

淀のわたり云々「いづかたに鳴きて行くらむほととぎす」淀のわたりのまだ夜ふかきに」

（拾遺集）

せ給ひて、雪御覽じけるに、「香爐峯のありさまいかならむ。」と

仰せられければ、清少納言御前に候ひけるが、申す事はなくて御簾をおしあげたりける、世の末まで優なる例にいひ傳へられけり。かの香爐峯の事は、白樂天老の後、この山の麓に一の草堂をしめて住みける時の詩に、

遺愛寺鐘欵枕聽。香爐峯雪撥簾看。

とあるを、帝仰せ出されけるによりて、御簾をばあげけるなり。かの清少納言は、天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の内、清原元輔の女にて、その家の風吹き傳へたりける上、心ざまわりなく優にて、折につけたるふるまひ、いみじき事多かりけり。

朋友選ぶべし

或人いはく、人は善き友にあはむことを希ふべきなり。「麻の中の蓬は、ためざるに自ら直し。」といふたとへあり。蓬は

香爐峯 支那江西省

廬山の一峯。

清少納言 歌人清原

元輔の女。一條天

皇の皇后定子に仕

へ、才覚あり。

白樂天 名は居易。

唐の詩人。

天曆 村上天皇の年

號。(二〇七—二〇七)

梨壺の五人 大中臣

能宣・清原元輔・源

順・紀時文・坂上望

城。

麻の中の蓬々

「蓬生麻中、不扶

自直」。(荀子)

枝さし直からぬ草なり。されども麻に生ひまじりぬれば、ゆがみて行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心のあしき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすが彼此を憚るほどに、自らたゞしくなる心なり。之によりて善き友にあはむことを、經にも説かれ、文にもすゝめたり。

顔氏が家訓には、

與善人居、如入芝蘭之室。久而自芳也。

與惡人居、如入鮑魚之肆。久而自臭也。

といへり。又或文には、人の心は水の入物に隨ふが如し。入物細ければ即ち細くなり、入物圓ければ即ち圓くなる。心は朋友にならふ。何ぞ擇ばざるべけむ」とかけり。又九條殿の遺誠には、「高聲惡狂の人に伴なふ事なかれ」と教へ給へり。

經 儒の聖典、四書五經の類。
顔氏が家訓 二卷。北齊の顔之推の著。

人の心云々「無情、水隨、方圓器」
(白樂天)

九條殿 右大臣藤原師輔。天徳四年(六三〇)歿、年九十三。

かゝれば、はかなく打語らはむ友なりとも、能くその人を選ぶべし。「薰蕕器を異にすべし」となり。花のもとに春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは、忘れ難く思ひ出でらるゝものなり。すべて友を語らふには、隔つる心なきを徳とす。ゆめ／＼心悪しからむ人には伴なふべからず。

芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき友なりけめ。子猷は、雪の夜月にあくがれて、遙かに剡縣の安道を尋ね、劉惔は、清風朗月に玄度のなき事を恨みけり。誠に心になふ友のなからむには、いかなる興宴も物憂く覺えぬべし。さればこそ梁の孝王は、鄒枚と聞えし二人の臣さりにしかば、兔園の遊をも止め給ひ、魯の仲尼は、子路といひしおもはしき弟子に後れて後には、互にすゝめける物をも捨て

蕕蕕云々「蕕澗曰、薰蕕不器、而藏。蕕不共、國而治。」(孔子家語) 四人の翁、東園公、夏黃公、用里先生、綺里季、これ、商山の四皓といふ。竹林の七賢、嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎。子猷、王徽之。子猷は字、晉代の人。風流をもつて名あり。安道、戴逵。安道は字、晉代の人。博學に巧なり。琴、書、畫。劉惔、字は眞長、晉代の人。許詢の字。晉代の人。風流を以て名あり。鄒枚、鄒陽と枚乘。共に詩文に長ず。兔園、梁の孝王の園。魯の仲尼は云々。「孔子哭、子路於中庭。有、人弔者、而夫子拜之。既哭、進、使者、問、故。」

給ひにけり。

清和第九の皇子貞眞親王の作り給へりける、

鄒枚散後平臺靜カナリ

空遣春風只斷腸ツツチ

文選第二十一、魏文帝與吳質書に曰く、

昔伯牙絕絃於鍾期、仲尼覆醢於子路、

痛知音之難遇、傷門人之無逮、

(十訓抄)

言は心の聲なりと、古人いへり。人の心の内にあること、言によりて外にいづ。一言みだりに發すれば、駟馬も追ひがたし。よき事もあしき事も、皆口よりいづ。口をつゝしめば、あやまちすくなく、恥辱なく、わざはひなし。(貝原益軒)

使者曰醢之矣。
遂命覆醢。
(禮記檀弓篇)
平臺 孝王の離宮。
文選 三十一卷。梁太子統が文選樓を築いて諸文人と共に集録したる文集。
伯牙・鍾期 共に周代の音楽家。

駟馬も 論語に「駟馬不レ及レ舌。」
貝原益軒 名は篤信。又損軒とも號す。儒者。正徳四年(三三四)歿、年八十五。

三 北畠親房

田中義成

正平九年甲午四月十八日、吉野朝の柱石たる准后北畠親房は大和賀名生に於て薨ぜり。時至らず志達せずして空しく幽明を隔つ。然れどもその絶代の忠魂は天地の間に留りて流芳長へに薫ず。

吉野朝を建設せしは卿の力なり。吉野朝の政治的經綸、軍事的計畫は皆卿の方寸より出でたり。南軍の根據を奥羽と九州とに置けるが如き、皇子を各地に派して地方南軍の中心としたるが如き、又自ら常陸に赴きて東國を經營し、以て足利氏の根據を覆さんと謀れるが如き、或は東西夾撃の策を樹て、或は尊氏直義兄弟の不和を利用して諸將を操縦し、苟も乗ずべき機會あれば之を逸することなく、假令一時的とはいへ、常

田中義成 史學者。文學博士。東京帝國大學教授。大正九年歿、年六十一。
親房 權大納言源師重の子。家北畠又は中院と稱す。正平九年(三〇四)四月十八日志成らずして薨す。年六十三。
正平 後村上天皇の御宇。
賀名生 奈良縣吉野郡。

直義 足利尊氏の同母弟。延元元年兄と共に叛す。後鎌倉に走り、尊氏に攻めらる。正平七年(三〇三)歿、年四十七。

に勝利を占めて北軍を苦しめ、敵將尊氏をして一日の安きをも得しめざりしもの、實に卿の謀略に基づかざるはなし。興國三年十月十六日、卿が關城に在りて結城親朝に與へたる書狀に曰く、

不肖之身、自稱之故、雖有其憚、先皇深被仰付之間、云當今御事、云竹園御事、爲一身之負累、諸方依之、伺此境之安危、候。忽失一命者、天下之御方一時可落力之條、殆無疑貽歟。

卿は後醍醐天皇より深重なる御依託を蒙り、一身を以て君國に捧げつゝも、自己の在亡は直ちに天下宮方の興廢に關するを思ひ、自ら其の身を重んぜることかくの如し。其の慷慨憂國、至誠奉公の情眞に欣慕するに堪へたり。吉野朝將士の遺詠を誦するに、いづれも憂國の至情溢れざるはなきも、一誦熱涙の滂沱たるを禁じ得ざるものは、實に卿が慨世の哀吟なり。

關城 茨城縣眞壁郡河内村。
結城親朝 忠臣宗廣の長子。晩年に至り、吉野朝の振はざるや、遂に足利氏に降る。弘和二年(二〇四)歿す。

試みにその一二を擧ぐれば、

露にぬれ霧にしほれてあしびきの山分け衣ほす

ひまもなし

片絲の亂れたる世を手にかけて苦しきものは我

が身なりけり

以て其の東奔西走、崎嶇艱難の狀、想見するを得べし。

抑、卿が身を獻じて勤王の節を盡くし、は、淵源する所あり。卿の曾祖父雅家は後嵯峨天皇に信任せられ、天皇の御出家に際して共に出家し、祖父師親も龜山天皇に従ひて出家せること曾祖父の如く、又、父師重は後宇多天皇の殊寵に感じ、同じく出家してその父祖に倣へり。かくの如く父子相繼いで主上に従つて出家せしは類稀なることにて、公卿補任にも「父子三代法體並例」と記されたり。卿が後醍醐天皇に忠節を抽ん

でも、由つて来る所遠しといふべし。

卿は後醍醐天皇の御信任厚く、皇子世良親王を預けらるゝや、一心を傾けてこれが輔導の任に當れり。親王は殊に賢明におはせしかば、天皇の御寵愛斜ならず、早くより天下の政務をも見習はしめられき。この時に當り、天皇は銳意皇運の恢復を圖り給ひたれば、卿も亦親王と共に樞機に參じ、大政を翼賛したり。然るに元徳二年、親王の早世せらるゝや、卿は我が世盡きぬる心地して、未だ齡四十にも至らざるに、遂に官を罷め、髪を削りて宗玄と號せり。時に朝野の人々親王を痛み奉ると同時に、卿の隱退を惜しみて、朝廷の衰微とまで慨嘆したり。卿の衆望を負ひしこと知るべきのみ。

その後世亂れて麻の如く、四海の民去就に迷ひければ、卿又かくて久しかるべくもあらず、天日を既墜に回さんとして、そ

の辛苦譬ふべくもあざりき。されど何時の世とても小人は利に喩り君子は義に喩る。利を追ふものは足利氏に靡き、



松の下の露 (植中直齋筆)

南風競はずして、遂に延元三年、顯家は攝津石津に、義貞は越前藤島に、相繼いで陣歿せり。花は咲けども吉野や風荒く、石走る音に御夢を驚かし給ひ、山禽徒らに腸を断つのみ。かくて空しく春秋を過ごして、延元

四年の秋の半ば、月明かき夜南山露深き處に於て、後醍醐天皇は劔を按じて神去り給ひ、その御陵は南面の例に倣はずして

顯家云々 北畠顯家

は延元三年(元)

五月二十二日、義

貞は閏七月二日に

戦死す。

石津 大阪府泉北郡

濱寺町。

藤島 福井縣吉田郡

西藤島村。

後醍醐天皇崩御 延

元四年八月十六日

午前二時頃。御壽

五十二。

北闕を望めり。時に卿は遠く常陸小田城に在りて此の悲報に接し萬斛の落涙堰きあふべくもあらざりき。後村上天皇立ち給ふに及びて、卿は猶先帝の顧命と新帝の依託とによりて遙かに政務にあづかれり。こゝに於て吉野朝を始め、四海勤王の軍は卿を信望すること衆星の北辰に向ふが如し。西陲に據れる阿蘇氏の如きは關山幾百里の遠きを辭せずして、成敗をこの人に請へりといふ。げにや卿の徳望は宇内に満ち、その任も亦重かりき。

興國の年號は嚴存すと雖も皇運未だ開くべくもあらず、迷雲南山を巡りて、天日八紘に照り渡らず、まして關城の夜雨蕭蕭として羈愁を催す時、楚歌四面に聞ゆ。しかも卿の胸中なほ綽々として餘裕を存し、危坐して神皇正統記を補訂す。一に大義名分を明かにするにありて、論旨堂々筆端風を生ずる

御陵 吉野藏王堂塔尾陵。奈良縣吉野郡吉野町吉野山に在す。
小田城 茨城縣筑波郡小田村。
後村上天皇 後醍醐天皇の第七皇子。御在位延元四年（先元）正平二十四年（1370）。同年三月崩御、御壽四十一。
阿蘇氏 代々阿蘇神社宮司として、その地方に雄たり。

ものあり。卿が史學に精通し和漢古今の治亂得失に明かなる、誠に驚嘆するに堪へたり。卿は又有職故實にも造詣深く、後村上天皇の立ち給ふや、兵馬倥傯の間にありて、よく職原鈔を草して、遙かに之を吉野朝に奉る。その博學洽聞なることは臥雲日件錄に、「前に三房あり、後に三房あり」と稱せるにても知るべし。蓋し卿が學問に深奥なりしことは、當時第一に推稱せる所にして、萬里小路宣房、吉田定房と共に後の三房の稱あり。以て後三條天皇の御宇の、大江匡房、藤原伊房、同爲房を前の三房といへるに對せり。三内口訣には、「宏才博覽、世の推すところ。」といひ、尺素往來には、卿が玄惠法印に資治通鑑を受け、この書に精通せしことを記せり。その政治的手腕といひ、軍事的經略といひ、卿が雄才大略は天賦に出づと雖も、亦その深遠博大なる學問に淵源すること少なからざるべし。

職原鈔 二卷。我が國の歴代官職の沿革及び補任の次第を記せる書。
臥雲日件錄 七十四卷。北禪和尚の著。萬里小路宣房、後醍醐天皇に仕へて大納言に至る。その子は藤房なり。
吉田定房 後醍醐天皇の傳たり。内大臣に至る。
大江匡房 學者にて詩歌文章をよくす。大藏卿に至る。
藤原伊房 學者。中納言に至る。
藤原爲房 官は參議。大藏卿に至る。
三内口訣 一卷。三條西實枝の著。繪旨・勅書・女房奉書等を記せり。

興國四年の秋雲霞の如き敵兵の東下するや、卿は屢書を白河に送りて結城親朝に忠孝の大義を説く。その語辭惻々として人の肺腑を穿つものあり。然るに親朝は遂に卿に従はず、其の父の遺訓に背き、忠孝の大節を抛ちて北軍に投ぜり。かくて一騎の來援だになく、關大寶の二城は忽ちに陥り、諸城も亦相尋いで降りければ、常陸の野また南軍の跡を止めず、卿が五年の辛勞こゝに水泡に歸せり。卿の痛憤如何ばかりなりしぞ。心ならずも海に浮かびて伊勢に還り、程を早めて吉野の行宮に謁す。一夜君臣、慷慨の涙に更の闌くるを覺えざりしならん。更に卿は久しく撫養せる熊野の水軍に命じ、西國の沿岸に出沒せしめて南軍に氣勢を添へ、一度は男山の行幸に際し、竊に兵を發して京師に入ると雖も、皇運日に非にして遂に賀名生に逃るゝに及んで、憂憤病んで薨す。嗚呼絶大

尺素往來 二卷。一條兼良の著。小朝拜・三節會・中宵・書籍・蹴鞠・茶毘・忌日・歳暮等六十餘種の文を載せたり。

玄憲法印 比叡山の學僧。後醍醐天皇の侍讀。正平五年(1350)寂、年八十有二。

資治通鑑 二百九十四卷。目錄三十卷。考異三十卷。宋の治平中司馬光勅を奉じ、戰國より五代に至る凡そ一千三百六十二年間の歷代君臣の事蹟を編修せるものなり。

大寶 茨城縣眞壁郡大寶村。

の忠臣も、天命又如何ともすべからず。

王事は寧ぞ成敗によつて論ぜん。唯順逆を知るこそ忠臣なれ。我が親房卿は生涯盡忠報國の念に燃えたるのみならず、その一族子孫も亦相繼いで王事に勤む。何ぞこれ壯なる。長子顯家は卿に先立ちて戰死せるが、次子顯信の裔は陸奥に残りて、後屢義兵を起して赤誠を天朝に捧げたり。其の末裔は津輕に住し、天文・永祿の頃に至りて、遂に亡びぬ。第三子顯能の子孫は伊勢に残りて伊勢國司と稱し、屢義舉を企てしが、遂に織田信長に征服せられりぬ。されど卿の同族にして近親なる久我氏は、今に至るまで猶存續せり。彼の明治維新の元勳岩倉具視は實にこの家より出でたり。蓋し卿の至誠天に通じ、五百餘年を距て、岩倉公を待ちて其の宿志を遂げられたりといふべし。

(南北朝時代史)

王事云々 大概清崇の詩に、

「王事寧將成敗論、唯知順逆是忠臣、斯公一死兒孫在、護得南朝五十春。」

顯信 正平中、懷良親王に従ひて少貳頼尙を筑前に攻めて戰歿す。

天文・永祿 天文は後奈良天皇の御宇、永祿は正親町天皇の御宇。

顯能 正平中、屢高師秋を破りて之を擒殺す。同七年京都に入りて足利義澄を走らす。弘和三年(1353)歿す。

三 落花の雪

太平記

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら陰謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寝となればものうきに、恩愛の契淺からぬ、わが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ

俊基朝臣 藤原氏。

後醍醐天皇の寵眷を得、日野資朝と共に興復の謀に参し、元弘二年(元二)鎌倉にて殺さる。

土岐十郎頼貞 美濃の住人。北條氏の討滅を計り、敗れて自殺す。

七月 元弘元年(元二)。

今度の白狀 共に事に與りて捕へられし僧文觀の陳述。

落花の雪 一またや見む交野のみの櫻狩の雪。ちる春の曙(新古今集、藤原俊成)。

交野 大阪府北河内郡交野村。

紅葉の錦 朝まだき嵐の山の寒ければ



(傳繪人上然法) 俗風の代時倉録

置き年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出でたまふ、心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢阪の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖をはるかに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み。駒もとゞろと踏みならず、勢多の長橋を打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかとおはれなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を駐めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。番場醒ヶ井柏原。不破の關屋は荒れはてて、猶もるものは秋の雨の、いつか我がみの尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、汐干に今や鳴海鴻。傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末

紅葉の錦きぬ人ぞなき(拾遺集、藤原公任)

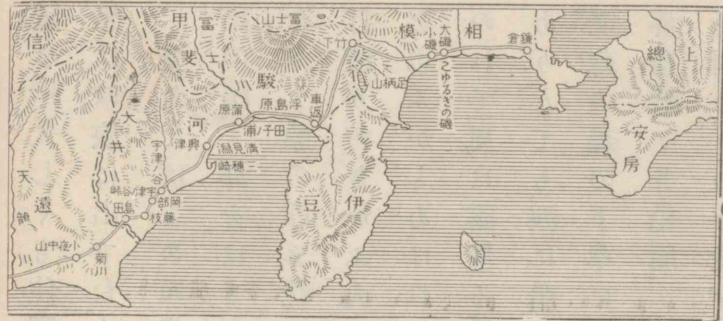
關の清水「逢阪の關の清水にかけみえて今やひくらむ望月の駒」(拾遺集、紀貫之)

鹽ならぬ海 琵琶湖

うねの野 「近江より朝たちくればうねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は」(古今集、大歌所御歌)

時雨も「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり」(古今集、紀貫之)

逢阪・打出の濱・勢多・うねの野・守山・篠原・鏡の山・老蘇の森・番場・醒ヶ井・柏原 近江にあり。不破の關屋「人住ま



(一) 圖地道海東舊

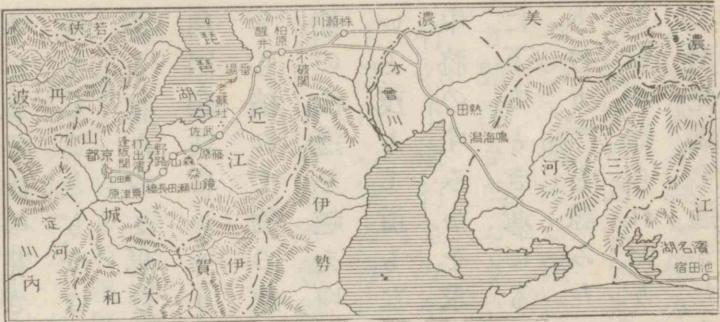
は何處ととほたふみ濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの、晚鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。轆を叩き

ぬ不破の關屋の板庇荒れにし後は只秋の風、（新古今集）。不破の關は美濃の國にあり。
なるみがた、（小夜千鳥聲こそ近くなるみがたかたむく月にしほや満つらむ）
（新古今集、藤原季能）
熱田・鳴海湯 尾張にあり。

命なりけり「年たけてまたこゆべし」と思ひきや命なりけりさやの中山（新古今集）。

濱名・池田の宿、小夜の中山・菊川 遠江にあり。



(二) 圖地道海東舊

きく川のおなじ流に身をやしづめむ

て警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、今東海道菊川、宿西岸而終命、と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。
いにしへもかゝるためしを

宗行卿 中御門中納言藤原宗行。

南陽縣 「南陽縣縣有甘谷、谷中水甘美、上有大菊。」
（略）：谷中人家飲此水、上壽百二十、其中百餘歲、七八十者即爲「天」
（風俗通）。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。
 島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物の悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、葛かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將のすみかを求むとて、東の方に下るとき、夢にも人の逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守



(繪圖所名道海東)宿の川菊

大井川 近江と駿河の境。
 龜山殿 今の京都市右京區嵯峨にありし離宮。

島田・藤枝・宇都の山・清見瀉・三保が崎・興津・蒲原・浮島が原・田子・車返・竹の下 駿河にあり。

夢にも人の「駿河なるうつの山へのうつしにも夢にも人のあはぬなりけり」(伊勢物語)。

に、いと涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、汐干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。

(太平記)

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の櫂をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、光も今はさらで、なに長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。(太平記)

上なき思 「富士のれの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり」(新古今集)。
 足柄山・大磯・小磯・こゆるぎの磯 相模にあり。

太平記 四十卷。作者不詳。花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年まで五十餘年間の戦記。

二二三 徒然草抄

吉田 兼好

ある人法然上人に、「念佛の時、眠にかされて行をおこたり侍ること、いかゞしてこの障をやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたらむほど念佛し給へ」と答へられける、いと尊かりけり。また「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」といはれけり。これも尊し。また「疑ひながらも、念佛すれば往生す」ともいはれけり。これもまた尊し。

五月五日、賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、各下りて、埒のきはによりたれど、殊に人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる櫓の木に法師の上りて木の股についで、物見るあり。

吉田兼好 本姓卜部氏。又吉田氏を稱す。鎌倉末期の文學者。正平五年(三〇〇)寂、年六十八。(一説に六十九)徒然草 上下二卷。兼好法師の隨筆を輯む。評論は社會萬般に亙り、論斷の基點は佛教を中心とせり。論理の高尙なる事我が國文學書中稀に見るところなり。

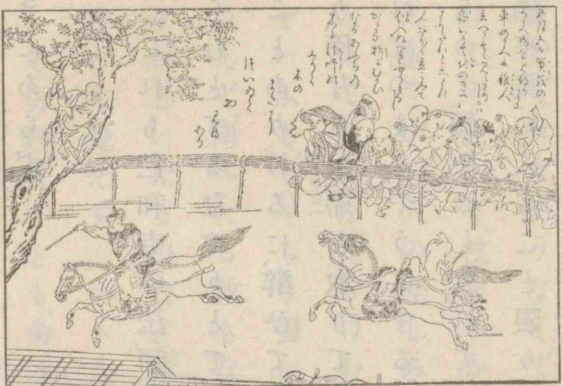
法然上人 明照大師。名は源空。美作の人。淨土宗の開祖。建曆二年(二三三)寂、年八十。

行 念佛の行を指せり。佛經の語。

往生 往生淨土。

櫓の木 せんだん(梅檀)の異名。

取りつきながらいたう眠りて、落ちぬべき時に、目を覺ますことたびしなり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれもの



といひて、みな後を見かへりて、「こゝへ入らせ候へ」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄

かな。かく危き枝の上にてやすき心ありて眠るらむよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、われらが生死の到來、たゞ今にもやあらむ。それを忘れてもの見て日をくらす。愚かなることは、なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさなこそ候ひけれ。最も愚かに候。」

生死の到來 佛經にいふ生老病死の四相なり。こゝにては單に、死の到來といふ意。

愚かに候 作者の言葉に感じて、見物の人たち自身にて自分を罵りて謂ふなり。

らざらむなれども、折からの思ひがけぬ心ちして、胸に當りけるにや。人木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずることなきにあらず。

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとて、おのゝ遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎あしがたを取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻ををしひらめて、顔をさし入れて舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばしかなでて後、ぬかむとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかがはせむとまどひけり。とかくすれば、頸のまはりかけ



鼎かづき (浮田一蕙筆)

人木石にあらねば
文選の鮑照の詩句
に「人非木石豈
無感。」

仁和寺 京都市右京
區花園町御室にあ
り。眞言宗の大本
山。世に御室と稱
ふ。

足鼎 單にかなへと
もいふ。三本足の
鼎を指せり。

て、血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければうち破らむとすれど、たやすく破れず。響きて堪へ難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上にかたびらをうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師いしやのがりゐて行きけるに、道すがら、人の怪しみ見ることに限りなし。醫師の許にさし入りて對ひゐたりけむありさま、さこそ異様ことさまなりけむ。ものをいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りゐて、泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなか生さざらむ。たゞ力を立てて引き給へ。」とて、薬のしべを、まはりにさし入れてかねを隔てて、頸もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうげなが

醫師のがり 「くすし」は「くすりし」の略、醫者のことなり。「がり」は接尾語にて、「許」の意。

くゞもり はつきりせぬこと。日本書紀に「渾池、如鷄子、溟滓而含牙。」書にも 醫書にも。

薬のしべ 薬の穂の心、わらみい。

ら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。
 高名の木のぼりといひし男、人を掟て、高き木にのぼせて
 梢を伐らせしに、いと危く見えし程は、いふ事もなくて、下る
 時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな、心して下りよ。」と
 詞をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るとも下りな
 む。いかにかくはいふぞ。」と申し侍りしかば、その事に候。
 目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず。過はや
 すき所になりて、必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤
 なれども、聖人の戒めになへり。鞠も難きところを蹴出し
 て後、やすく思へば、必ず落つると侍るやらむ。

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒

下藤 身分の低い者、
上藤の對照語。

「智者千慮有」
「一」

失、愚者千慮有、
得。また論語に、
「不以人廢言」とあり。

孝養 孝行。親無量
壽經に、「孝ニ養父
母ニ奉ニ事師長」云
云。

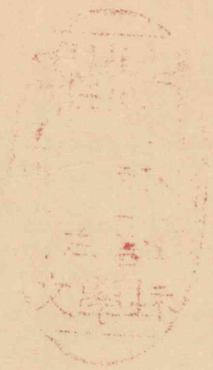
夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、御子はおはすや。」と
 問ひしに、「二人ももち侍らず。」と答へしかば、「さてはもののお
 はれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いと
 おそろし。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。」と
 いひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、か
 かる者の心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子もち
 てこそ親の志は思ひ知るなれ。
 世に語りつたふる事、誠はあいなきにあや、多くはみな虚言な
 り。あるにも過ぎて、人は物をいひなすに、まして年月過ぎ、境
 も隔りぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめ
 ぬれば、やがて定りぬ。道々の物の上手のいみじき事など、頑
 なる人の、その道知らぬは、そゝろに神の如くにいへども、道知

れる人は、さらに信も起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるゝをも顧みず、口にまかせていひ散らすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又我もまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをごめきていふは、その人の虚言にはあらず。げにくしく所々うちおぼめき、よく知らぬ由して、さりながら、つまづあはせて語る虚言は、おそろしきことなり。わがため面目ある様にいはれぬ虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興ざる虚言は、ひとり「さもなかりしものを」といはむも詮なくて、聞き居たる程に、證人にさへなされて、いと定りぬべし。とにもかくにも虚言多き世なり。たゞ常にある、珍しからぬ事のまゝに心得たらむ、よろづにたがふべからず。下さまの人の物がたりは、耳驚くことのみあり。よき人は、怪しき事を語らず。かくはいへ

よき人は「子不語怪力亂神」(論語)。

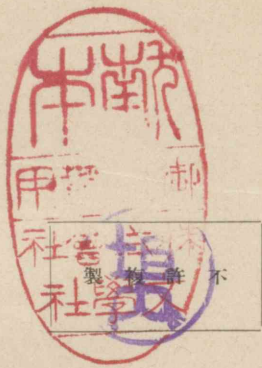
ど、佛神の奇特ゴンシヤ權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大方は誠しくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

達人の人を見る眼は、少しもあやまる所あるべからず。譬へば或人の世にそらごとを構へ出して、人をはかる事あらむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。餘りに深く信を起して、猶わづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。又聊かおぼつかなく覺えて、頼むにもあらず、頼まずもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふ事なれば、さもあらむとて、やみぬる人もあり、又様々に推し、心得たるよし



昭和十二年七月二十日 印
昭和十二年七月二十三日 發
昭和十三年一月二十二日 訂正再版印刷
昭和十三年一月二十五日 訂正再版發行

女子國文新編(四年制)全八册奥附
自卷八一 定價 各金五拾八錢



著者 垣内松三
發行者兼者 株式會社 文藝學社
印刷所 日東印刷株式會社
東京市神田區美土代町十八番地
株式會社 文藝學社
代表者 小林竹雄
東京市本郷區昆砂町三十六番地

發兌 株式會社 文學社

關西一手販賣所 株式會社 盛文館

東京市神田區美土代町十八番地
振替口座東京三八五七八番
大阪市西區北通り二丁目三番
振替口座大阪一七五四三番

